

# 伊能忠敬

研究

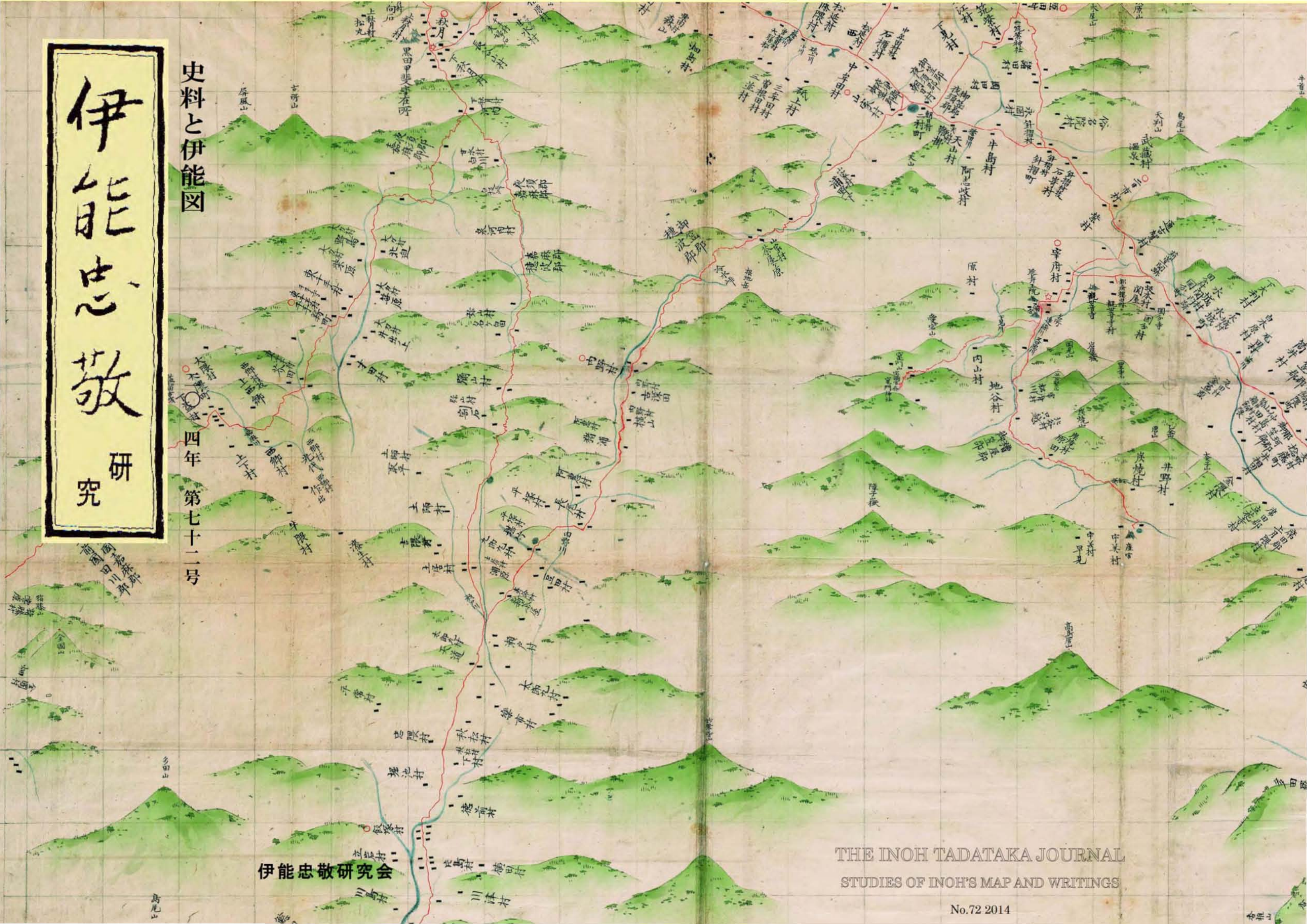
史料と伊能図

四年 第七十二号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.72 2014





## 伊能大図一八七号 福岡の部分

(アメリカ議会図書館蔵)

飯塚市のフロア展が終了しました。福岡は伊能測量の測線密度が非常に高い地域なので、飯塚を含め、周辺地域をアメリカ大図復元版から切り出してみました。

飯塚は筑豊地区の中心都市で、石炭は江戸時代の中期(1700年)頃から製塩の燃料として使われ、小倉藩・福岡藩は石炭の採掘・輸送・販売を藩の管理下に置いたといわれる。しかし、伊能図で見る限り、飯塚村の集落が大きいわけでもなく普通の村の感じである。

明治以降の急速な炭鉱の開発では、日鉄鉱業、三菱鉱業、三井鉱山、麻生鉱業などの炭鉱が設けられ、その他中小の炭鉱経営者からお金持ちが輩出し、それらの遺構が多く残っている。麻生鉱業は麻生副総理の本拠で、今、麻生セメントとなっているが、市内には麻生飯塚病院というように、



宝満宮竈門神社  
(ほうまんぐうかまどじんじゃ)  
玉依姫命を主祭神にお祀りする神社。  
又昔より九州総鎮守の神として  
崇められた。  
福岡県太宰府市

麻生の名を冠とする施設は多い。穂波郡、嘉麻郡なども大手鉱山の所在地だったが、村名としては出てこない。

南の秋月はいま朝倉市となっているが、城下町が残っており、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。大宰府は宰府村と記されており、今も太宰府市宰府として地名が残っている。天満宮と別当の延壽王院が描かれる。太宰府の東北には宝満山竈門(かまど)神社が描かれ、態々参拝のための測線が延びているから、当時もかなり有名だったのだろう。

宝満山は大宰府の鬼門(東北)の位置にあり、「大宰府鎮護の神」として崇敬されたという。一帯は国の史跡に指定されている。

もうひとつ、大宰府から北に向かつて行き止まり測線があり、産宮にたどり着いている。ここは産宮神社(さんのみやじんじゃ)といい、奈留多姫命(なるたひめのみこと)、鷗鷺草葺不合尊(うがやふきあえずのみこと)神武天皇、玉依姫命(たまよりひめのみこと)を祀る安産守護の神様です。渡辺一郎(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)



秋月の町並み  
国の重要伝統的建造物群保存地区に  
町全体が指定されている。  
福岡県朝倉市

## 目次

72号

## グラビア

## ●伊能図の旅

琉球国・之図

大図第三〇号の一部 噴火湾北岸

大図第一三四号の一部 大和路

星埜 由尚 1

## 研究と話題

●伊能図から読み取る沿岸地形の移り変わり(1)

中海沿岸の埋め立て

高安 克己 6

●新説 伊能忠敬物語 第三話

「伊能測量はじまる」

渡辺 一郎 10

●銚子測量―富士山の方位測量の地

「犬若岬今昔」

宮内 敏 20

## 忠敬談話室

●出雲市 手銭家文書の紹介

渡辺 一郎 26

●伊能忠敬銚子測量記念碑建立詳報

宮内 敏 33

●伊能探訪のすすめ

河崎 倫代 37

―五島列島の旅―

河崎 倫代 37

●伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

河崎 倫代 41

―各地の記念碑・標柱等紹介(一)―河崎 倫代

河崎 倫代 41

●山武歳時記(五) 江戸庶民の信仰を集めた房総の大寺

江口 俊子 44

「芝山仁王尊観音寺」

江口 俊子 44

## 資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第九回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺 一郎 編著 井上 辰男 46

## ニュース・会員便り・お知らせ

諏訪公園伊能忠敬銅像清掃・伊能ウオーク・富岡八幡宮

伊能銅像清掃・新聞報道から・会員便り・事務局連絡

54



# 伊能図の旅 琉球国之図



琉球国之図(尚財団蔵、琉球新報社作成の絵葉書から)

## 琉球国之図

昨年十一月に、琉球新報一二〇周年を記念し、那覇の沖縄県立武道館において開催された「琉球国之図と完全復元伊能図フロア展」は、約五千名の方々の来場を得ることができた。沖縄の方々に伊能図を見ていただく貴重な機会となったが、「琉球国之図」の初公開は、誠に意義深いものであった。「琉球国之図」は、琉球国王尚家の秘宝として長らく門外不出とされてきたため、その存在が広く知られることはなかったが、沖縄県立博物館・美術館館長の安里進氏を中心とする沖縄県の研究者的の方々により、その来歴や意義などが明らかに becoming つつある。この度は、「琉球国之図」を所蔵する尚財団の特別な計らいにより公開することができた。

江戸時代には、清と琉球は冊封関係にあり、一七一九年に清が派遣した冊封使に同行してきた高位の測量官平安がフランス式の測量術を琉球王府に伝えた。一七三八年琉球王府は、この測量術を用いて検地を実施し、十三年の年月をかけて沖縄本島、久米島、渡名喜島、慶良間諸島、伊平屋島、伊是名島の「間切島針図」を作成した。本土で言えば村絵図に相当する地図である。地図作成には、三角測量の手法が用いられ、印部石(しるびいし)と称される図根点の標石が設置され、現在残存しているものもある。「間切島針図」は、沖縄戦により失われてしまったが、近年「真和志間切針図」の写真が発見され、測量の実態を知る手がかりとして研究が進みつつある。

「琉球国之図」は、一七九六年に高原里之子親雲上(たかばるさとめしべーちん)が「間切針図」を編集して作成したものである。

「間切島針図」から「間切集成図」が縮小編集され、さらに「琉球国之図」に編集されたと考えられている。「琉球国之図」は、縮尺が約十三万分之一で伊能中図より大きい。伊能大図よりは小さい。長らく琉球国王尚家の宝物として公開されずに保管されていたため、保存状態が非常によい。各間切が色分けされ、色彩も鮮明な美しい地図である。現在尚財団の所蔵である。「間切集成図」の一部は、沖縄県立博物館の所蔵で、複製資料が常時展示されている。なお、「間切集成図」は、米軍の沖縄進駐の際に略奪されたが、琉米歴史研究会の尽力により返還されたものである。

伊能測量以前に琉球において高度な測量・地図作成が行われていたことを直接示す「琉球国之図」を伊能図フロア展に合わせて展示できたことは、これまで各地で開催された伊能図フロア展の中でも出色の有意義な展示であった。なお、鹿児島・指宿においても展示された。

琉球における近世の測量・地図については、一般社団法人沖縄しまたて協会の発行する建設情報紙「しまたて」四六号から五二号に至る連載「琉球の測量技術と技師たち」に詳しい。(星埜)



# 噴火湾北岸

伊能大図第 30 号の一部  
(アメリカ議会図書館蔵)



噴火湾北岸電子国土測線重ね図(東京カートグラフィック猪原紘太氏 作成)

## 噴火湾北岸レブンゲ山道からアブタまで

レブンゲ山道は、幕府が開削した山道で、蝦夷の三大難所の一つであった。ここでは分水界が極端に噴火湾側によっており、噴火湾から直接断崖が聳えるため、海岸は通行が不可能であった。蝦夷地測量において、伊能測量隊は、レブンゲ山道の難所を越し、レブンゲの詰合出役の仮家に三日逗留したのちアブタに向かう。アブタまでも、山越えと海岸が交互に続く大難所であった。

レブンゲ山道を測線は通っているが、陸軍による最終成果模写図(以後「最終成果」という)と国立公文書館所蔵の「松前距蝦夷行程測量分図」(以後「測量分図」と言う)とは測線の形状において大きく異なり、「最終成果」では、比較的平滑な測線であるが、「測量分図」では大きな凹凸のある測線で、烏帽子石という岩が描かれている。一方、「最終成果」には、ライハとルヨナイという地名が記されているが、「測量分図」には、地名は皆無である。

レブンゲからアブタまでの「最終成果」の測線と「測量分図」の測線を比較しても、描かれている測線には大きな違いが見られる。「測量分図」では、レブンゲから東に向かいすぐ山道を通っている。測線は屈曲が激しい。一方、「最終成果」では、測線は海岸からやや内陸側にとられ、単純で平滑な測線に沿って岩石海岸の描写がされている。そしてチャシと注記された岩石海岸の突出があり、測線はその突出を避けて内陸側を迂回する。この突出は、現在の地形図には茶津崎と記された岬に当たるものと思われる。「測量分図」では、この間は細かい屈曲の見られる測線で、茶津崎の突出などは表現されていない。

「最終成果」では、さらに東のヲツフケシと記される集落まで海岸線を測量し、再び山道を越えている。ヲツフケシまでウトロチクシ、チャシ、タブコブの地名が記入されているが、「測量分図」では、ヲブケシとなり、他の地名の記載はない。さらに、「最終成果」では、ヲツフケシからオツフケシ崎を迂回する山道を通過し、フキベツ川の海岸から再び山道を通過してフレナイ、アブタと海岸の測量を行っている。この間も、山道を通る測線の形状は「最終成果」と「測量分図」では異なり、地名の記載も異なる。「最終成果」に記載されているベ、及びホロナイ川は、「測量分図」には記載されていない。「測量分図」のヘシベツは、「最終成果」ではフキベツと記されている。フレナイ、アブタは両図とも同名である。

このようにレブンゲからアブタに至る噴火湾北岸の測線の描かれ方は、「最終成果」と「測量分図」では大きく異なり、最終上程版である「大日本沿海輿地全図」の作成に当たっては、第一次の伊能忠敬測量隊の成果は利用されていないと見るべきであろう。第一次蝦夷地測量は、歩測で行ったため、精度が良くないことは、伊能忠敬自身が自覚していたことを「測量日記」の中でも述べている。そのことが忠敬をして「大日本沿海輿地全図」の編集に当たって第一次測量の成果を自ら使用させなかったと筆者は考えているが、蝦夷地南岸の他地区の大図も検討し、いずれ明らかにしたいと考えている。

(星埜)





# 大和路の測量

大図第一三四号の一部

上：伊能大図第 134 号の一部 (アメリカ議会図書館蔵)

## 大和路の測量

第六次四国測量の帰途、伊能測量隊は大和路の測量を行っている。大坂から斑鳩の地に入り、法隆寺などを訪ね、當麻寺まで一方通行の測量を行い、奈良に出て、東大寺、春日神社を参詣し、南下して丹波市(現在天理市)から桜井を通過して飛鳥に向かい、吉野の金峰山寺まで測量して引き返し、今井町(現在橿原市)から桜井を通過して伊賀に抜けた。第八次測量においても、京都から奈良に向かい、興福寺の周りを測量して参詣し、伊賀上野に向かう途中で柳生に分岐する測線を延ばしている。

大図一三四号に示された大和路測量の測線と寺社の分布を見ると、大和の有名な寺社を逃さず廻っていることがわかる。そして、天皇陵についても多数記載されている。また、大和の大名は、郡山の柳沢家と高取の植村家は城持大名であるが、他は数万石の陣屋大名である。これらの城下、陣屋を巡って測量している。但し、大和新庄藩永井家(二万石)には足を延ばしていない。永井家は、定

府大名で、幕末になってから新庄に近い櫛羅に陣屋を築いた。そのようなことが大和新庄藩には足を運ばなかった理由かもしれない。しかし、同じ定府大名の柳生藩には陣屋まで一方通行の測線が延びている。

このように、多数の有名な寺社の門前、社前で測量し、小さな城下をもめぐっているのは、いわば観光地として訪れ、ついでに測量したのかも知れない。しかし、私は、そのような要素もあるかもしれないが、やはり寺社や城下の位置を明らかにする必要がある、わざわざ寺社・城下・陣屋まで測線を延ばしたものと考えている。江戸時代の寺社は、公的施設の一つであり、現代の我々もつ寺社に対する考え方は異なっていたのではないだろうか。測量日記の記述においても、寺社に関する記載は細かく、回を重ねることに詳しくなっている。

城下を巡っているのも、大名の居所を地図の上で明確にする意図があったのではないかと思う。伊能測量隊の測量行程については、当然幕府の意向が反映されたと考えられるが、その際、大名の城下・陣屋、御朱印を受けている寺院・神社などについての情報は当然重視されたであろう。但し、大和周辺の測線を見ると、高野山には行っていない、吉野の測量の帰途、紀ノ川を下り和歌山に抜けることは容易であったと思うが、その点は不思議である。



## 中海沿岸の埋め立て

高安克己

はじめに

海岸付近に形成された閉鎖的水域を沿岸潟湖という。それはたいだい大きな河川の河口域にあって、海とは砂州などによって隔てられている。日本は周囲を海に囲まれているので沿岸潟湖はあちこちに見られ、日本の全湖沼面積の約四〇％を占めている。また、それらは歴史的に人間活動が最も活発に行われてきた平野や海岸部に立地しているので、積極的に人間が利用してきた自然環境でもある。

かつて私はこのような潟湖の形成や環境の変化について研究していた。その過程で、地形図を使って過去の沿岸地形の移り変わりを調べようとしたことがあった。ご存じのように、五万分の一地形図の作成は国家事業として一八九五年から始まり、約三〇年の歳月をかけて全国をカバーした。その後も何回か改測されて版を重ね、さらに二万五〇〇〇分の一地形図から現在の電子地図に至っている。これらの地形図を順に見ていくことによって、沿岸地形の変遷を時代を追ってみることができる、と考えたのである。そして、この方法によって沿岸部の開発やそれに伴う環境変化などがより具体的に見てとれるようになってきた。

しかし、地形図を頼りに過去の岸辺の様子を知ることができるのはせいぜい一〇〇年ほど前までだ。明治時代に発行された五万分の一地形図には、それより古い時代に改変されたと思われる地形が

明らかに認められるのだが、それがいつなのか、どの範囲までなのか、といった情報は読み取ることができない。古文書を読めばある程度解るのだろうが、しかしそれだけでは地図上にその範囲を示したり、他の理化学的な方法によって明らかにした水域の環境変化と結びつけて考察したりすることには無理がある。

いろいろ考えた末にたどり着いたのが「伊能図」というわけである。伊能図は明治の五万分の一地形図からさらに約一〇〇年さかのぼった沿岸の情報を提供してくれるはずである。

### 伊能図と地形図との重ね合わせ

まず、明治の五万分の一地形図と伊能図と伊能図をパソコンの画像ソフトを使って重ね合わせてみた。伊能図には赤線で側線が記入されており、その何力所かは旧街道の辻や寺社の位置などで特定できる。それをよりどころに重ねようとするのだが、こちらを合わせるとあちらがずれる、と言った具合になかなかうまく重ならない。導線法でつくられた伊能図と、三角測量を使った五万分の一地形図との差がこういうところに出てきているのだろうか。

ともかく、そのまま重ねることはできないことがわかり、別のソフトを使って伊能図を部分的に伸ばしたり縮ませたりして無理矢理地形図に近い形にゆがませることに方針を転換した。今では、「地図太郎」というソフト(東京カートグラフィック社製、社長の猪原紘太氏は本会員)を使うことによって、この作業がだいぶ楽になった。

また、伊能図は沿岸を測量した、と言うことに

なっているが、必ずしもすべての汀線を実測した、と言うことではなさそうだ。側線と汀線が重なっていないところは、岸近くの街道などから見通して、目測で描いたところもあるように思われる。

加えて、私が利用した伊能図は主にアメリカ議会図書館所蔵の大図であるが、これは本誌六五号で菱山剛秀氏が指摘されているように、明治初期に方眼法で模写されたものと考えられ、その方法からしても側線が原本と寸分違わず一致するとは限らない。測量隊の野帳が残っていれば・とつくづく思ったりもした。佐原の伊能忠敬資料館で測量隊が残した「下図」を見せていただいたことがあり、このほうが当初のデータにもとづく側線が描かれているように見受けられたが、まだ十分にチェックが進んでいない。

ともかく、いろいろ難点もあるが、当時としては最高レベルの実測図である伊能図を利用する価値は十分にある、と考えて作業を進めてきた。その過程で、沿岸の開発や産業史などを考える上で参考になると思われる場所がいくつかあったので、これから何回かに分けて紹介していきたいと思う。まずは私のホーム・フィールドであった山陰・中海から始めよう。

図1には中海全域で伊能大図(一八〇六・一八一三年測量)を、図2には一八九九年に測図された五万分の一地形図の重ね合わせた結果を示す。この図には国土地理院の電子地図「ウオッチず」も同縮尺にして重ねてある。伊能図が大きくゆがんでいることが、もとの伊能図(図1)と比較すると解ると思う。これでは細部が解らないので、汀線が大きく変化しているところについて、少し詳しく見ていくことにする。





図1 伊能大図の  
中海（アメリカ議会  
図書館所蔵大図第  
155号、部分）

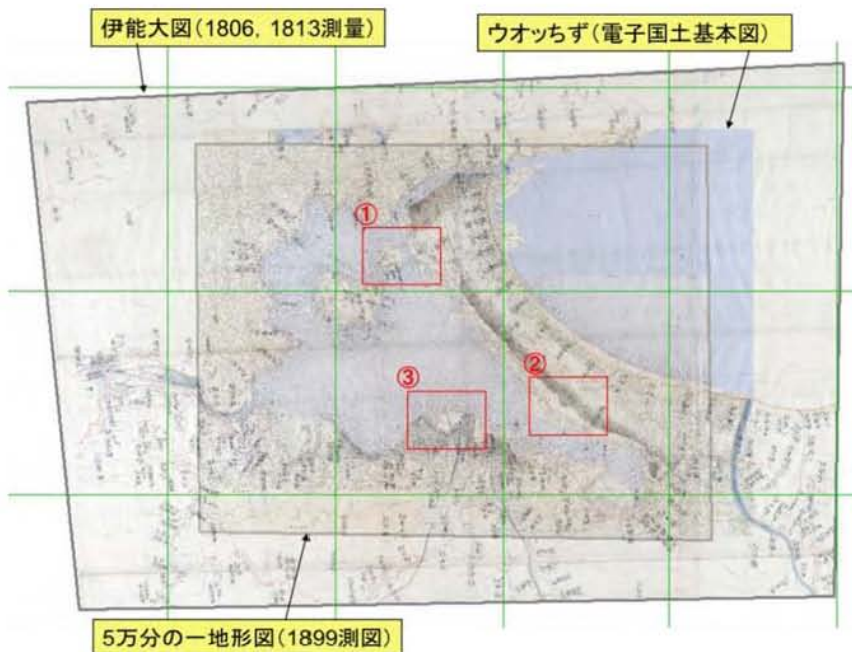


図2 伊能図と5万分の1地形図との重ね合わせ（「地図太郎」東京カートグラフィック社製を使用）

5万分の1地形図：国土地理院所蔵旧版地形図、ウオッチーズ：国土地理院の電子国土基本図閲覧サービス（以下の図で同様に使用）、○番号は本文に対応した地域

# ①中浦水道

中海には大根島（だいこんじま）と江島（えしま）という二つの島が浮かんでいる。東側の小さな島が江島で、対岸の鳥取県弓ヶ浜半島との間にある水道が中浦水道である。

現在の中浦水道は国営の中海干拓・淡水化事業に伴って開削された長さ一・三キロメートル、幅五〇〇メートルの水道で、一九七四年には淡水化のための長大な水門が建設された。しかし、事業の中止によって

二〇〇九年までには撤去され、道路橋としての機能は約三〇〇メートル下流側に二〇〇四年に建設された江島大橋に移った。

江島は隣の大根島と同様に約一八万年前に噴火した玄武岩の火山で、その後の海面上昇に伴って高所が水面上に残り、周りは砂州の発達に伴って自然に埋め立てられて浅瀬になったものである。江戸時代には松江藩の後押しもあって各地で新田開発が進み、この江島でも島民が中心となって

水深が浅い島の東側の埋め立てが行われた。とくに文化・文政の頃には島外の農民も加わって新田の拡張が急速に進んだ。

伊能測量隊が江島を測量したのは文化三年六月十九日（一八〇三年八月三日）で、高橋善助率いる一番手（四名）と坂部貞兵衛率いる二番手（三名）が手分けをして測量している。

図3の右図を見ると、伊能図の側線が東側（右側）に膨らんだように見える部分がある。ここがその頃迄に埋め立てられたところで、それから約一〇〇年後の明治の地形図では東側の弓ヶ浜方面に向かってさらに広く張り出した埋め立て地が見られる。

松江藩は三代藩主松平綱近の代（一六七五～一七〇四年）に新田開発を促進するため歛下年季という制度を取り入れた。これは新田を開発してから一〇年間は年貢の徴収を猶予する、と言うものである。玄武岩の火山島である大根島や江島では元々水田が殆どなかったため、農民は周辺の海底の砂を鋤簾ですくい上げるなどして新田を少しずつ広げていった。伊能測量隊が来た頃、大根島の二子村に住んでいた権四郎も、積極的に中浦の埋め立てに関わった農民の一人であり、文政元年（一八一八年）までに約八反五畝（約八五坪）の土地を開発している。その権四郎は測量隊の一番手一行を江島測量が終わった日に二子村の自宅に泊めている。

天保初年（一八三〇年代）には藩が薬用人参の栽培のため大根島の農地を接収し、その代替え地造成の目的で中浦の新田開発を藩直轄事業として進めた。その後明治に入っても埋め立ては進み、旧版地図に見られるように中浦水道は対岸の弓ヶ



行われていた。この水域が干拓されることとなり、中浦水道が浚渫・拡幅され、海水の遡上を止めるために九〇億円をかけて水門が建設された。その水門も現在は撤去されていて、四一四畧に及ぶ長



図3 中浦水道付近の重ね合わせ図  
(左)と1899(明治32)年測図の旧版  
五万分の一地形図「境」(部分)に伊能図  
側線を青線で記入した図(下)



浜渡村と指呼の距離にまで狭くなった。  
この状況が大きく変わったのは、前述した干拓淡水化事業に伴う中浦水道開削である。淡水と海水の交換は、それ迄浅瀬だった中浦水道を避けて大根島を北から西に大きく迂回する水域で

大な姿を見ることはできない。  
伊能図は二〇〇年にわたって歴史に翻弄されたこの水域の原点を示している。

②彦名付近  
日本最大の砂州と言われる弓ヶ浜は、砂州の延びの方向に並ぶ砂丘列によって、内浜、中浜、外浜に三分される。中海側が内浜に相当するが、ここも江戸時代後半以降に埋め立てが進んだところである。図4に弓ヶ浜半島の付け根に近い米子市彦名地区の状況を示す。

江戸時代における弓ヶ浜内浜の埋め立ては、前述した中浦水道の埋め立てとは異なる方法で行われた。すなわち、内浜の埋め立ては砂丘の砂を崩して人工的に沿岸まで流し込む方法で行われ、そうしてできた土地を「流し新田」と呼んでいる。中浦水道のように海底の砂をすくい上げて埋め立てた土地は「あげ新田」という。

弓ヶ浜半島にはその中軸部に沿って米川(よねかわ)という用水路が流れている。米川の開削は砂丘地に灌漑することを目的に元禄年間に始まり、約六〇年かけて順次砂州の先端方向に延長されていった。日野川河口近くから取水された米川の水は水量も豊富で、分水された水は現在でも弓ヶ浜の耕地を潤している。

内浜の「流し新田」ではこの米川の水を使っている。内浜の砂丘地を崩し、米川から引いた水路に流し、その砂を中海沿岸に堆積させて埋め立て地を広げていくのである。現在の地形図ではわかりにくくなっているが、旧版地形図(とくに二万五〇〇〇分の一地形図)をみると、砂丘の高まりが不自然に崩されているのをあちこちに見ること

ができる。

図4の伊能図で薄墨がかかっているようなところ、これは道路に沿って内浜の集落が続いているところであるが、中海側の耕地の大部分は埋め立てられた「流し新田」だったようである。この付近の米川は享保一三年(一七二八年)頃には完成しているの、おそらくそれ以後、伊能測量隊がやって来る前までに造成された土地であろう。

その頃、日野川の上流部では「鉄穴(かんな)流し」と呼ばれる方法で風化した花崗岩を崩して砂鉄をとっていた。農閑期に行われた「鉄穴流し」で生じる大量の泥水は米川經由で新田に引き入れられ、泥を堆積させて水田の土壌を改良していたとも言われている。

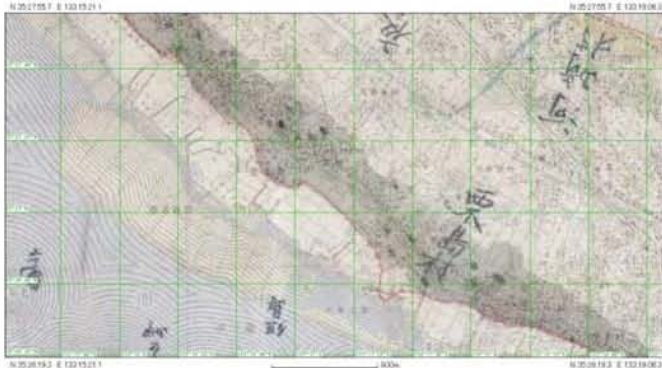


図4 彦名付近の重ね合わせ図(上)と1899(明治32)年測図の旧版五万分の一地形図「米子」(部分)に伊能図側線を青線で記入した図(右)



伊能測量隊が弓ヶ浜を測量するのは文化三年八月十日から十一日(一八〇六年九月二・二二日)である。高橋善助の二番手と坂部貞兵衛の三番手がそれぞれ四人ずつに手分けしているが、このうち彦島付近を測量したのは高橋らのチームで八月十日に行っている。『測量日記』に粟島村と記述されているのがこのあたりである。

伊能図で粟島村と書かれた左下に海岸線が突出しているところがあるが、ここは小高い丘になっていて粟嶋神社がまつられている。この丘も元は名前が示すように島であり、周辺は宝暦四年(一七五四年)から米子の名家後藤家の一族によって開発された新田である。

内浜の新田開発はその後引き続き行われ、旧版地形図に見られるように一〇〇年間で約一キロメートル沖合まで埋め立てが進んだところもある。さらに第二次大戦後の中海干拓事業では彦名干拓地(一四四町)が造成された。この事業では中海湖底の土砂が大量に浚渫され、干拓用地の埋め立てに用いられた。沖合の湖底にはこのときの浚渫地があちこちに点在している。また、干拓地の埋め立てが中断されている間にハクチョウを始め多くの野鳥が棲みつくようになり、現在では米子水鳥公園としてラムサール条約登録湿地の一部を構成している。

### ③飯梨川河口

飯梨(いいなし)川は延長三八・三キロメートル、流域面積は二〇八平方キロメートルあり、中海に流入する河川では大橋川(斐伊川の松江市街域における呼称)を除くと最大の河川である。飯梨川のすぐ東側には伯太(はくた)川(延長二六・五キロメートル、流域面

積九一・二平方キロメートル)もあり、一帯は三角州が複合した平野を構成している。この平野の東端に安来の街がある。

両河川とも上流域には花崗岩地帯が広がり、近世には「鉄穴流し」による砂鉄採取が盛んに行われていた。三角州はそれによって運ばれた大量の土砂が形成したものであるが、土砂量が多いため天井川となつて洪水を繰り返しながら河口の位置を頻繁に変えた。さらに松江藩は「川違え(かわたがえ)」といって人工的に河口の位置を変えて土地を増やし、新田開発を行う政策を積極的に進めた。これらが複雑に重なり合つて奇妙な河口域の地形がつけられていく。「川違え」は斐伊川が宍道湖に流入する斐川平野東部でも盛んに行われているが、これについては次回に詳述することにする。

飯梨川河口で最も古いものは一番西に振つたもので、図4では左上方に膨らんで飛び出したように描かれている。ここは尼子時代(一五五〇年頃)の河口にできた扇状地状三角州で、その後時代とともに東方(図では右)に移動しつつ三角州を広げている。

伊能測量隊はこの地を文化三年八月七日(一八〇六年九月一六日)に踏査している。下川辺政五郎以下六名の隊員が山陰道に沿って東に向かって測量を進める途中で、一部(平山郡蔵ら三名)が別れて海岸沿いを測つたようである。

図示された河口の位置は直線的で現在よりもやや東に寄っている。図4右の旧版地形図を見ると白く抜けた旧河道が逆「く」の字型に示され、河口の位置は一致するものの河道の形状は異なる。おそらく山陰道沿いで押さえた河道の位置と河口の位置を直線的に結んで作図したものと思われる。

この河道は明和八年(一七七一年)以降のものであることが解っている。

また天保十一年(一八四〇年)にはさらに西に「川違え」して、湾状にくぼんだ水域を埋め立てようとしている。この河道は現在に引き継がれており、突状三角州が沖合に急速に成長している様子が見て取れる。

### 参考文献

- 『八束町誌』八束町教育委員会、一九九二
- 『夜見村誌(その1)』弓浜における夜見村の歴史とその周辺
- 森 納、一九七五
- 『斐伊川誌』建設省中国地方局出雲工務事務所、一九九五

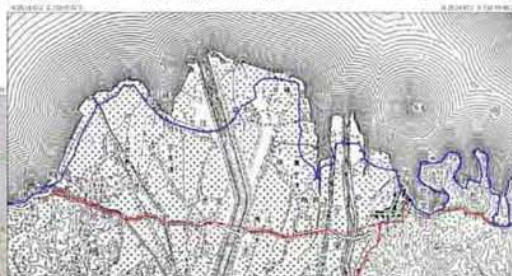
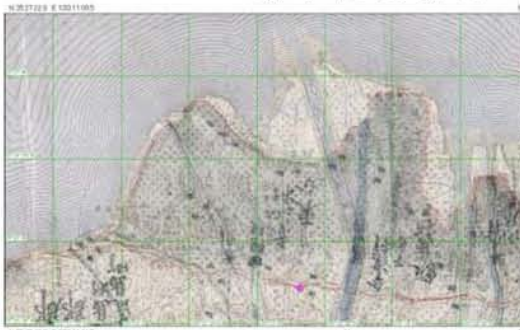


図4 飯梨川河口付近の重ね合わせ図(上)と1899(明治32)年測図の旧版五万分の一地形図「米子」(部分)に伊能図例線を青線(赤線は街道筋)で記入した図(右)



## 連載 新説 伊能忠敬物語

### 第三話

#### 伊能測量はじまる

#### 渡辺 一郎

お信の父・桑原の出発までの奔走 師匠の高橋至時から蝦夷地測量の申請をしたが、許可はなかなか下りなかった。師弟でやきもきしていると、お船手から同心が携行荷物の調査に来訪する。忠敬は、喜んで持参したい荷物の書付を提出する一方、七〇両もかけて器材の準備にかかる。高橋と天文方同列の大阪の質商・間重富をとめない時計師と交渉して、着々と用意を進めた。しかし許可がなかなか降りず忠敬は悩む。こんな経緯ではなかったらどうか？

お栄がいう「桑原先生にお願いしたら」「そうだな。桑原先生なら事情を調べていただけるかも知れない」。

早速、桑原宅を訪問。「こういう事情です。その筋に何とかお願いしていただけないでしょうか」

「わかりました。やってみましょう。しかし、こういうことは、ほんとうは事前に言ってくればよかった」

「恐れ入ります。天文方・高橋先生が引き受けてくれたので安心していました」

「世の中は表もあれば裏もある。すぐ堀田摂津守様に伺ってみよう」といって、仙台藩上級藩医の桑原は若年寄・堀田摂津守正敦を訪問して内意を探る。

桑原は仙台藩主伊達宗村の八男だった堀田とはごく親しい間柄だった。堀田邸はいつも多数の来客が面会の順番待ちをしていたが、医者という立場もあって、桑原が訪れると直ぐ逢うことができた。

「ご無沙汰いたしております。摂津守様には何時もご壮健で何よりと存じます」

「こちらこそ、健康にいつも氣を使っていたいてありがとうございます」

「ところで、今日はどんなお話ですか」

「摂津守様、天文方の高橋に蝦夷地測量をさせるそうですね」

「話を進めているが、それが何か？」

「天文方の測量の実務をやるのは、私の亡くなった娘のつれ合い、娘婿の伊能忠敬です」

「聞いています」

「高橋への入門のときもお口添えを、お願いしましたが、大変仕事熱心な男でして、測量に持参する器具などを七〇両もかけて準備しています。ところが、なかなか許可が降りないので、やきもきしています。お上のお詮議はどんな具合なのでしょう、伺いたくてやって参りました」

「困った顔付きで」それは少し早まったことをしてくれただけ。実は蝦夷地測量をおこなうことは決まっている。しかし、伊能が持参したいという器具の量は膨大なようだ。船で行くならよいが、本人は陸路を希望している。奥州街道は宿駅の規模が大きくないのに、蝦夷地への公用旅行者が多く、測量用の人馬を新たに申し付けにくいのだ。測量を来年に出来ないかという話が出ている。「それはまた。本人はさぞガツカリするでしょう。何しろ張り切っていますので」

「蝦夷地の地図が出来ればお役に立つと思っています。荷物を減らすとか何とか実現の方法はないでしょうか」

「蝦夷地のいい地図が欲しいのは山々だ。それに桑原殿の頼みとあっては、何とかせねばなるまい。蝦夷地取締御用掛に、伊能とも相談して実現可能な案を考えさせよう」

「ありがとうございます。いつも、ご無理を聞いていただいて恐れ入ります」

桑原は話をすぐ忠敬に知らせる。

**蝦夷地取締御用掛から呼び出し** 忠敬は蝦夷地取締御用掛の責任者松平信濃守宅に呼び出され、御用掛の旗本や、目付けなども参加して打ち合わせがおこなわれた。御用掛はしきりに船の利用を薦める。しかし、忠敬は船を利用したのでは緯度一度の距離の実測ができない。どうしても陸路を行く必要があった。だが、そのことは表には出せないで大変だった。

入り組んだ入江など入口を通るだけでは、奥行きが分からないので正確な地図は作れないなど理由をこじつけて反対する。

荷物が多いとの苦情には荷物を減らすことにした。また御用に使える人足が足りない分は自費を払って自由相場で調達し、迷惑はかけないと妥協もする。

**測量許可がおりる** 寛政十二年閏四月十四日、越中島の蝦夷会所（蝦夷地取締御用掛の役所）に呼び出され、お徒目付からお沙汰書をわたされる。遂に許可がおりた。

第一次測量命令の現物は、伊能忠敬記念館の国



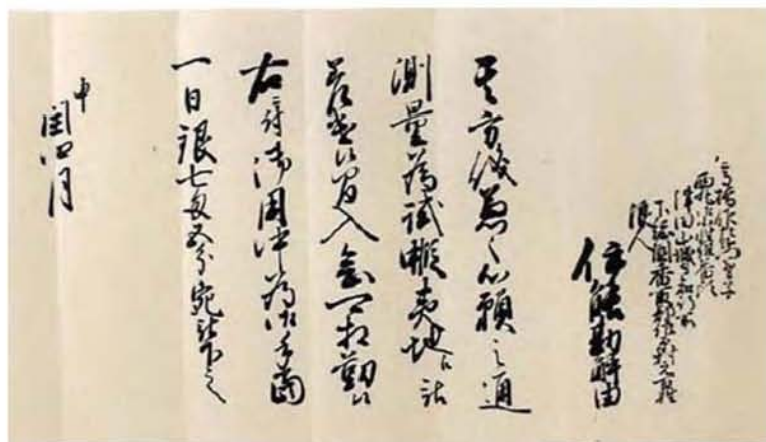
宝伊能忠敬関係資料のなかに現存している。

高橋作左衛門弟子  
西丸御小姓組番頭  
津田山城守知行所  
下総国香取郡佐原村元百姓  
浪人

伊能勘解由

其方儀兼々心願之通、測量試みとして、蝦夷地  
江差し遣わされ候間、入念相勤可く候、右に付き、  
御用中御手当として、一日銀七匁五分宛てこれを  
下さる  
申

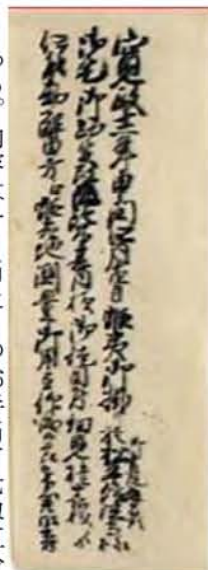
閏四月



伊能忠敬記念館蔵 国宝・第一次測量御沙汰書

包み紙には

「寛政十二年申閏四月十四日、蝦夷御掛り松平信濃守様御宅に於いて御勘定改役鈴木甚内様、御徒目付細見権十郎様より伊能勘解由方江蝦夷地測量御用仰せ渡され候節、申聞けられ候書付」



御沙汰書上封

とある。内容は一日当たりのお手当て七匁五分を与えるという測量命令である。旅行中の人馬の調達については、勘定奉行配下の旗本である御勘定から「添え触れ」が渡された。

人足三人、馬二頭をお定め賃金（自由相場の半額くらいという）を受け取って提供するように、という後年に較べればおそろしく悪い待遇だったが、忠敬は大いに喜び、早速高橋役所に報告する。

天文方・高橋役所

「測量許可が出ておめでとう。多少でもお手当がついてよかった。桑原様や摂津守様の御高配に感謝している」

「すべては先生のお陰です」

「幕府との折衝に時間がかかり過ぎて、蝦夷地に向かうには遅くなってしまう。寒くならぬうちに帰着できるよう出発を急がなければならぬ」

「本州は歩測。蝦夷地だけ縄を張るということではどうか」

「かしこまりました」  
「召しつれる隊員の心当たりはありますか。私の家来の門倉隼太は少し気が短くそこつな男です」

が、よければ使っていたいて構いませんが」

「それはありがたい。素人ばかりでなく、暦学天文の知識がある門倉さんが参加していただければ心強い」

高橋は門倉を呼んで話を伝える。

「ありがとうございます。私も内心できればお供したいと考えていました」

「それでは決まりだ」

「その他は、私の婿入りの際の仮親・平山藤右衛門さんの次男・宗平、と私の次男秀蔵です。従者としては吉助の他に長助を雇い入れました」お栄は旅行用品の支度に、かいがいしく働く。

### 第一次測量出発

寛政一二年閏四月一九日、夜明け前に一同忠敬宅に集合。食事のあと、夜明けとともに自宅を出た。近くの富岡八幡に参詣。お栄も従う。神職のお祓いを受け、無事を祈念してから出かける。測量器具などの荷物は前夜、船で千住宿に送ってあった。

隠宅と呼ばれている忠敬宅は、深川の黒江町の幸七店（たな）にあり、忠敬制作の江戸府内図でみると、家の前は堀だったらしい。当時、江戸の街を縦横に通じていた水路を通る船はいまの車のようなものだった。

測量は千住宿からなので江戸府内は無測量で通行する。両国橋を渡り、蔵前の天文方高橋役所に挨拶。早朝にもかかわらず、高橋家では高張り提灯と幕を張って、酒肴を用意し門出を祝う。至時は最後の注意を与える。「天体観測だけはしっかりやって欲しい。特に蝦夷地では」

千住宿には見送り人が待っていた。佐原の領



主・津田山城守の家士・渡辺清蔵、息子の伊能三郎右衛門、親類の伊能七左衛門、測量機器制作者の時計師・弥五郎、弥三郎父子、妻ミチのあとの内妻妙諦の父・柏木幸七父子ら一四人が集まっています。饒別を渡される。忠敬は、酒肴を命じて暫しの別れを告げる。

送別宴を終わり、見送り人が参観するなかで、宿で調達した人足を含め測量隊を編成する。

忠敬は小方位盤。記録掛は門倉で野帳と矢立を持つ。梵天持ちは秀蔵、吉助の2人、歩測は忠敬、門倉、平山宗平の3人だった。荷物宰領の長助は、馬二匹に象限儀、子午線儀を分解して搭載、他に荷物人足六人を従える。

馬二匹と人足三人は蝦夷会所の御勘定（旗本）から頂いた「添え触れ」により、相場のほぼ半値の「お定めの賃銀」で雇った者たちだが、他の人足三人は自腹の人足だった。

人足三人は測量器具、製図用具、事務用品と忠敬の私物に、他の三人は従う隊員五人の旅行用品を持った。侍分の四人の刀も預かる。隊員の脇差は竹光。身の回り品だけの軽装だった。準備が整った頃合いを見て、忠敬は見送り人に説明する。

「これから私がやろうとしていることを、ざっと説明します」

「千住宿から奥州街道を測るとして、千住宿木戸の傍らに、測量開始地点の杭を打ちます」「それから見通し可能な遠方に、この梵天を立てさせます。そして、開始地点から梵天を狙う直線の方位を小象限儀で測ります」「方位は北を子とし、十二支で表します。一支を一〇等分して分。その下は厘です。小象限儀では厘の読み取りは困難なので、一〇または一〇〇単位で読み取ります」「それから梵天に

向かって歩測で距離を測ります」「蝦夷地は出来れば間縄を張って実測を考えています」「そして、宿泊地では、晴天であれば、夜、天体観測をおこないます」

「大儀なことですね。お元氣なお帰りを待っています」

「ありがとうございます」「これから作る地図が後世のお役にたてばと、頑張るつもりです」

「旅先に氣をつけてください」

「ありがとうございます。では行つてまいります」

このようにして、伊能測量隊は往復一八〇日、3200キロメートルの第一次測量へと出発した。伊能忠敬も、これから一七年もかけて日本全土を実測することになるとは、夢にも思っていなかった大事業の第一歩であつた。

忠敬は、このあと七回、遠国の測量に出かけるのだが、かならず内弟子と従者をつれて富岡八幡宮に詣でて、そのまま旅に出発した。後年、幕府役人となつて下役を配属されたあとは、下役とは品川など街道の始発点で合流することにし、自分は内弟子・従者のみをつれて参詣した。

高橋至時の想い こうして蝦夷地測量が始まったが、師匠の高橋至時は全面的に忠敬を信用していたわけではなかつた。なにしろ高齢である。忘れ物などもよくしたという。熱意と努力でどこまでできるか結果を注目していた。ところが忠敬は、おそろしいばかりの熱心さで、蝦夷地の根室近く

のニシベツ（現在は本別海といわれている）まで歩き、往復三二〇キロの道のりを、一八〇日かけて歩測した。また、夜は八ヶ所で象限儀を据

え付けて恒星の高度を測り、深川の自宅で観測した恒星表と比較して緯度を求めている。

緯度一度の距離を測定するのに歩測とはあまりにも大雑把な感じであるが、幕府との折衝に時間がかかつて出発が遅れ、蝦夷地つまり北海道が寒くならないうちに、というわけで大変急いでいた。至時とも相談のうえだった。

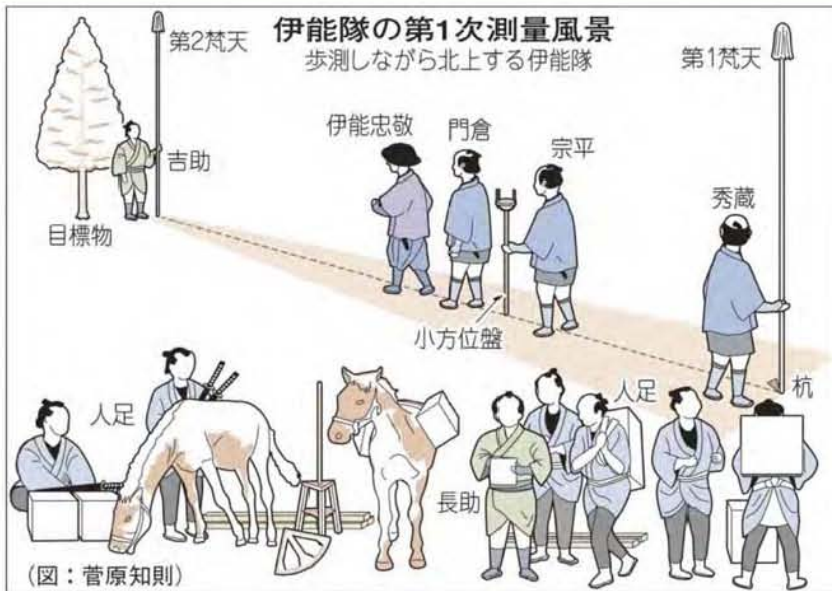
千住から津軽半島の最先端の三厩（みんまや）まで二日で歩いている。一日四〇キロである。目標を決め、ブロックを区切って歩数を数えたと思われるが、一日四〇キロを、口を聞かずに黙々と歩数を数える作業を想像していただきたい。しんどい仕事である。たぶん複数の人間が数えて平均をとる、ブロックごとに交代する、など単調な作業を間違ひなくおこなうための努力がされているに違ひない。忠敬は創意・工夫で作業性を改善するのは得意であつた。

街道の曲がり角では角度を測るが、彎窠羅鍼（わんからしん）というむずかしい名前がついた杖先磁石で測られた。杖の先に、ジャイロコンパスのように斜面に立てても水平が保てるような構造の磁石盤を取り付けたものである。大変便利なもので、当時は各地で測量に使われていたが、忠敬はこれを改良して利用した。

作業には少なくとも杖先磁石一名、歩測二名、梵天二名、記録一名、道具・荷物宰領一名、などが必要だったから、六人では手不足だったろう。五五歳の忠敬も二〇歳前後の若い弟子たちと一緒に現場の作業にあたったと思われる。

第一次測量の風景 測量日記には、測量模様の記録が殆どないが、素人ばかりで始めた第一次測





「JWA会報より」

量の風景を推測してみよう。

測量第一夜は奥州街道の大沢宿だった。江戸に近い場所では宿駅が整備されており、町方、村方の経済力が強かったため、遠隔の在方のように、伊能測量の支援が大騒ぎだったというように記録はあまり見当たらない。粛々と実行された。こんな具合ではないか。

「宿場が見えてきたな。もう少しだ。秀蔵、越の八番に梵天を立てろ。吉助、宿入り口の一本杉に九番の梵天だ」

吉助は「はい」と答えて梵天を持って駆け出す。

秀蔵配置につく。忠敬八番から九番を見通して若干位置を直す。

忠敬「よし」第1梵天を八番杭からはずさせ、小方位盤を杭の位置に立て、梵天九の北からの方位を測る。

忠敬「子の六分半」

門倉「越印八番から九番の方位、先生の測定は子の六分半」復唱して野帳に記録する。

忠敬「門倉、測れ」

門倉、代わって測定する。

門倉「子の六分半」かと思えます」

忠敬「自分が測ったとおり記録すればよい」「わしに遠慮は無用だ」

門倉「分かりました。越印八番から九番の方位、門倉の測定は、子の六分半」と呼称して門倉自身の測定値を記録する。

忠敬「秀蔵、梵天1を越印八番に」

秀蔵「はい」

秀蔵は越印八番に第1梵天を立てる。荷物宰領の長助は馬、人足を従えて越印八番付近に先程から待機している。

忠敬「さあ、行こう」忠敬は第2梵天に向かって歩数を数えながら歩き出す。門倉、宗平が同様に続く。歩測チーム、第2梵天に到着。

忠敬「二五〇歩」

門倉「二一〇歩」

宗平「二六〇歩」

忠敬「少しばらつきが大きいな。始めたばかりだから、いいだろう。そのまま記録しておけ」

門倉は復唱しながら記録する。忠敬、小方位盤で2番から1番の方位を測る。

忠敬「越印九番から八番の方位子の六分半」「宗

平、測ってみろ」

宗平は小方位盤を忠敬から受取り八番の南から右廻りの方位を測る。

宗平「越印九番から八番の方位子の六分半」門倉、復唱しながら記録する。

忠敬「第1梵天、引き揚げ」

門倉は秀蔵と長助に合図を送って、第1梵天と荷物隊を前進させる。第1梵天の秀蔵は駆け足で、杭と木槌を持つ人足と共に第2梵天の位置にやってくる。

忠敬「秀蔵、次は高札場だな」

秀蔵は「はい」といって駆け出す。吉助はそのまま。あとは同じ動作の繰り返しだ。

第一次測量の第一夜は、いま越谷市の一部となっている大沢宿だった。千住から約二〇キロメートル。忠実に歩測と方位の測定を行ってきた一行はくたくただったが、データ整理のあとは反省会。忠敬はいう。

「歩測には皆、まいったようだな」「始めたばかりなので仕方がないが、結果のバラツキがひどすぎる。初日の値は私の歩数で整理するが、毎日これでは話にならない」「仕方がない。明日からは、早朝、まず歩幅調整をしてから出発だ」

一夜明けたあとは一同元氣回復。歩測に挑戦するため、夜明けとともに一同勢揃いした。

「ここから宿はずれの一本松まで約百間ある。何歩で歩けるか、歩いてみる。そして数えながら帰ってこい。門倉、向こうに着いたら、全員の歩数を記録しろ。帰りの歩数は私に申告しろ。行きも帰りも同じ歩数で歩ければ合格だ」

一同、歩き始める。歩幅調整帰着後、



「秀蔵は行きと帰りでも5歩以内だ」  
間違っても5歩以内だ」

「門倉、2歩違い？。それはすごい。（携帯算盤をはじいて）誤差はコンマ8厘だ。使える。お前は今日も歩測係りをやれ」

「これから毎日、出発前に歩幅の調整をしよう。これはその日の体調にも関係あるからな。皆、暇なときに練習しろ。調子のいいのが歩測係りだ。大事な役だぞ、わかったか」

「承知しました」

「では出発しよう」

宿亭主の見送りを受けて出発する。昨日の止め杭に着いて

「皆揃ったな。では始める。秀蔵、高札場に打った昨日の止め杭の脇に第1梵天、吉助、宿はずれの1本松の近くに第2梵天だ」

秀蔵、吉助は「はい」と答えて梵天を持って駆け出して配置につく。忠敬1番から2番を見通して若干位置を直す。

「よし」

第1梵天を止め杭からはずさせ、小方位盤を杭の位置に立て、第2梵天の方位を測る。

「子の7分半」

門倉「沢印1番から2番の方位、先生の測定は子の7分半」

復唱して野帳に記録する。

「門倉、測れ」

門倉、代わって測定する。

門倉「子の7分13」

二人の測定値はそのまま記録し、あと宿舎で整理のとき平均して決定した。忠敬はこのように誤差防止の対策を、初めから作業のなかに織り込ん

でいた。

二泊目は古河だった。伊能隊はこのあと三度この道筋を通ることになる。伊能大図の朱の測量線を現代図と対比するとそのルートをとどめることができる。バイパスがあつて道が変わっているが大きく離れてはいない。大沢宿から古河までは二十数キロを歩測しながら一日で歩いている。

栗橋の利根川の渡船場には、有名な房川渡中田関所（栗橋関所）があつた。関所は利根川の堤防の上にあり、ここを通らなければ渡し船に乗ることはできない。

伊能隊は関所手形を持参しなかったが、勘定所の旗本・御勘定が発行した添え触れ、或いは勘定奉行発行の御証文を提示して、問題なく通れたという。

蝦夷地測量の復路は、同じように歩測をしたとも、引いて歩けば距離がわかる量程車を引いて帰ったともいう。

さらに本州東海岸を測った第二次測量でも復路は奥州街道を戻っている。このときは歩測ではなく、いまの巻尺に相当する間縄を張って実測しているからより正確な距離が測られた。最初の測量がラフなものであつたとしても、後に制作された伊能図で修正されており、影響は残らない。

古河城下で天体観測 天測は伊能測量の表看板だった。差し支えない限り見物人に公開された。

古河に着いたのは測量二日目の閏四月二〇日の暮れ六つ前だった。夜、宿舎で天体観測。

宿亭主の柏屋平八は、問屋場から届けられた忠敬の「泊まり触れ」と「幕府御勘定方の添え触れ写」を見比べながらつぶやく、

「南北に見晴らしのよい一〇坪くらいの土地か」  
「うちの庭では無理だな」

「火の見下の空き地を借りよう」

会所に断り、周囲に幕を張って場所を用意させる。平山宗平が、荷物宰領の長助および馬と荷物を引きつれ、先乗りとして到着。

「幕府天文方・高橋作左衛門の手の方でござる」

「お先触れ、伺っております」

「お触れにありました天測場をこの先に用意しました。どうぞ御見分下さい」

宿亭主はすぐに天測場に案内する。宗平は荷物を宿の前に待たせて亭主に従う。

「これでよい」とうなづき、長助に向かって

「象限儀、子午線儀をここに降ろせ」

「他の荷物は部屋に運ぶ」

長助と馬子は天測場で荷物おろし。宗平は亭主に従い宿に入り部屋を調べる。人足頭が従う。

「この三部屋だな」

「先生の部屋はここにしよう。机を入れろ」

人足頭は忠敬の荷物を運びいれさせる。

宗平は亭主に向かい

「この部屋は作業部屋だ。亭主。大きな板と台を用意して欲しいな」

「親方、製図用具、筆記具の包みはここだ」

作業用品の荷物が運び入れられる。宿亭主は台と張板を並べて作業台を用意する。

「皆の部屋はそっちだ。個人の身の回り品はそっちへ運んでくれ」

人足は指図に従って荷物を持ち込む。ほぼ、済んだところへ、忠敬が梵天持ちを従えてやってくる。宿亭主は玄關に迎え。

「お疲れ様でした。お役目ご苦労様です。南北に



見晴らしの良い一〇坪の場所は屋敷内にはありませんので、あすこに用意させていただきました」

「結構です。お手数をかけます」

梵天に向かって

「火の目の前に梵天を立てる」

「今日はここを留め杭にする。火の見印と名付けよう」

梵天は約五〇間手前にいる小方位盤に向かって。梵天を振り、手で合図を送って今日の最終測点であることを連絡する。

小方位盤は最終梵天に対し方位を測り、歩測係りは歩き出す。忠敬はすすぎをとって宿に上がり、宗平の案内で部屋割を見分、自分の部屋に入る。

宿亭主、茶を持たせ再び挨拶に出る。

測量班全員火の見下に到着。門倉が指揮をする。

「今日はここで終わりで。これから象限儀、子午線儀を組み立てる」

2匹の馬から象限儀、子午線儀を降ろす。門倉は人足に向かって

「今日はお疲れさんだった。なれない荷物で大変だったろう。宿へ行って先生から酒手を受け取ってお引き上げください」

忠敬は荷物を受け取って、人足たちに「ご苦労さん」と心づけを渡す。賃金は一括して問屋場で支払い済みだった。

馬子と人足はそれぞれ礼を述べて引き揚げる。

門倉ら3人は2匹の馬から降ろした象限儀、子午線儀の組み立てに大奮。うまくゆかないので、秀蔵がぼやく。

「これで組み立ては三回目ですが、先生宅で練習したようにうまくいかないな」

「これから毎日ですか。門倉さん」

「晴れてさえいれば、天測はかせないサ」

「雨さえ降らなければ支度をする」

「やるやらないは、それから先生が判断される」

組み立て終わって、門倉が

「このくらいでいいだろう。宿に入ろう」

一同、宿舎に入る。旅装を解いて、夜の作業支度になったところで、忠敬の周りに集まる。忠敬から作業の指示。

「今日も一日ご苦労さん。食事のあと、今日は晴れだから、六つ半から天測をやる。門倉さんと宗平、吉助は天測場」

「私と秀蔵は今日測ったデータの整理をしよう」

「はい」

門倉は尋ねる。

「今日の天測はどんな順でいたしましょう」

「獅子座のベータ、乙女座アルファ、牛飼座アルファ、冠座アルファ、蠍座アルファ、の順かな」

「私もあとで天測場を覗いてみる」

「よろしく願います」

**食事のあとの天測場** 後年の伊能測量では多数の隊員が得られたので、余裕を持って作業できた

が、初めは人手が少ないので大変だった。門倉が子午線儀と記録、宗平が象限儀を受け持つ恒星を待ちうけ、吉助が使い走りを勤めた。

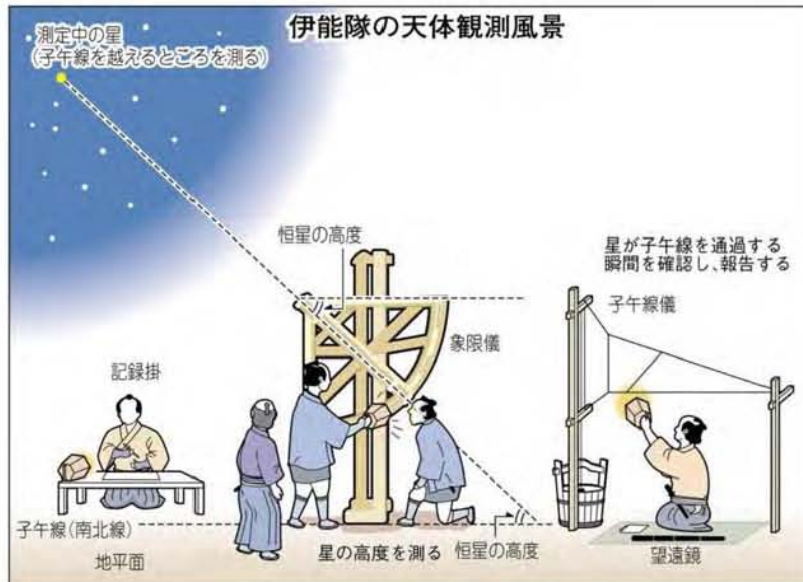
観測開始。宗平が象限儀につき、門倉は子午線儀を眺めている。2人とも、観測順序を書いたメモを片手に星を見つめている。門倉は望遠鏡で時々星を確かめる。目指す星を見つけたらしく指

さして

「平山さん、あれが獅子座のベータのようですね」

「そうですね。乙女座アルファ、牛飼座アルファ、

伊能隊の天体観測風景



「JWA会報より」



門倉、子午線儀を離れ、明かりを持って、大急ぎで、象限儀の目盛りに近寄る。

1・2秒間において、宗平は追いかけている望遠鏡の内部の縦線に獅子座のベータを捕らえ、「獅子座のベータ南中！」と叫ぶ。宗平は「68度22分9」と象限儀の目盛りを読み上げる。門倉も「68度22分9」と復唱して懐のメモに記録する。

「次は 乙女座だ」と門倉はいいながら、子午線儀の下に駆けてゆき、アルファ星を狙う。以下は繰り返した。

このようにして古河城下では一〇個の星を測った。  
(注) 当時の星座名は中国名だが、現在使われている名称を用いた。第一次測量で測られた星座名の記録はない。天測場面の構成は、会員・大西博士の御指導を頂き、当日使えた筈の星を利用した。

翌二一日は朝六つ半後(夜明けから約一時間後)出発、白沢、氏家、喜連川、佐久山を経て二二日は大田原泊。

白河で旧知に会う 二三日朝六つ半出立。鍋掛、八丁越堀、芦野、白坂を経て白河城下に到着。白河藩主松平定信は、いまは退いているが、五年前までは老中首座兼將軍補佐役として政務全般を取り仕切り、寛政の改革を主導していた。

現在老中首座の松平信明、若年寄・堀田摂津守らは、定信に登用された面々である。引退後も定信が選んだ閣僚は留任しており、自身も溜の間詰という格式で幕閣の諮問に応じ、老中の評議に出席することも出来た。伊能測量が実現したのは、こういう政治体制があったからである。

忠敬は何も知らずに白河に着いたが、予定していた御用宿は手狭なので、宿替えをして因幡屋茂兵衛に移る。ところが偶然にも、この宿の主人は佐原で旧知であった。丸屋伊右衛門という者の酒屋を借りて、丸屋清吉とって酒造をしていた人だった。同業だったからよく知っている。聞いてみると、丙午の年、大坂の米相場で失敗して損金を出し、白河へ来て宿屋渡世をしているとのこと。このひとは近江の産というが、なかなか振幅が大きい人生だ。忠敬との邂逅を喜び、酒肴を出して歓迎してくれたので、女房にチップとして南鐙一枚を渡した。

進行速度は一日四〇キロ 二四日白河から本宮へ一三里一〇町、二五日朝大雨のち小雨の悪天候をついて一〇里一五町で福島城下、二六日小雨の中を大河原まで一〇里二八町、二七日仙台城下国分町へ九里八町。二八日古川一里一町、二九日有壁一〇里二三町、五月一日水沢へ八里一町、二日花巻八里二町、と測って三日には九里三六町を測って盛岡城下に着く。

合計歩測距離は九一里一八町。キロ数にして三六六キロ。一日平均四〇・七キロである。二四・二五・二六日は朝六つ後(夜明け少し後)から七つ後(日暮れ直前)まで、約一〇時間測っている。二七日からは少し時間を短縮して八つ後に宿に入るようにした。それでも約八時間の作業である。時速は四・七キロくらいだった。

強行軍だったのは日程が詰まっていたためである。江戸をたった閏四月一九日は陽暦に直すと六月一〇日、北海道の根室近くまで往復三二〇〇キロを歩いて寒くない内に帰着しなければならなかった。十一月一杯に戻るとすると一七〇日し

かない。一日一八・八キロである。

そのため高橋至時は、本州内は歩測、蝦夷地のみ間縄を張って実測するよう指示していた。測量の出来ない日もある。蝦夷地の状況は不明であるから、日程を稼げる場所は交通路の整っている奥州街道しかなかった。時速四・七キロで歩測し、方位を計測する作業を想像して欲しい。伊能隊は超人的速度で北上した。日記にも脇道や名所旧跡の記述は殆どない。盛岡城下の入り口に船橋があり、北上川を渡る。この川は仙台領石巻に流れると記すのみである。

三厩から渡海難航 盛岡から三厩まで沼宮内、福岡、五戸、野辺地、青森、平館、と泊まりを重ねて三厩の宿舎工藤忠兵衛に一〇日八つ半頃つく。ここは函館へ渡海の船着場で、津軽藩が函館まで御役船を運航し公用旅行者や旅人をわたしていた。翌一一日は朝晴天だったが、庄屋は「丑寅の風」と風向きを張り出して欠航を知らせた。

覚

一、本日丑寅の風にて御出帆相成り不申候、此段御断奉申上候、以上

庄屋忠兵衛 判

この風向きは東風で「ヤマセ」といったが、津軽海峡を東から風がふいては帆船は、東北の函館に着くことは出来ない。一二日風。一三日同じ、夜天測。一四日無風、逗留。一五日子丑の風。一六日東風変わらず。一七日風向きが直ったので五つ過ぎに乗船し乗り出したが、風がやんだので三厩に戻る。一八日東風にて滞在。とうとう滞在は八日になってしまった。



一九日も風はよくなかったが、船頭が気の毒がつて船を出したという。しかし風向きが悪いので、函館には着けず、吉岡(福島町)へ昼ごろ着いて、風の様子を見ることになった。風が変わらないので上陸し吉岡泊。

二〇日、朝四つまで風の好転をまつたが、変わらないので、函館に向かつて歩き出す。一里半ばかり歩いて九つ時福島という町について宿泊。

二一日 夜明けとともに福島を出て、七里十町測つて知内に着く。ここまでは松前藩の支配で、ここから東は当時幕府の直轄領となっていた。

それから三里で木古内へ着いて宿泊。途中は難路で、始め海岸沿いを試みたが、途中で断念した。

日記には書いてないが、伊能大図に断念した途中までの測線が記されている。經由した道もひどくて四十八瀬という小川を数十回も横断するくねくね道だった。

二三日 夜明け後出発して一〇里三〇町歩いて、函館に着く。七つ頃というから夕方だった。宿舎は地蔵町の伊藤茂左衛門倅幸治郎。すぐ蝦夷地取締御用掛の函館役所へ届書を提出。そのあと函館役所駐在の諸役人に挨拶に廻る。

御勘定・水越源兵衛、勘定とは勘定奉行配下の旗本の役名で上級役人である。支配勘定・寺田忠右衛門、支配と名がついているが勘定の下役で目見え以下の役職。御普請役小林新五郎、布山牧三郎、こちらは普請奉行から派遣された下役でもちろんお目見え以下。

そして御先手同心井上喜左衛門にも挨拶した。江戸で貰ってきた函館までの添え触れは、小林新五郎に渡し、新たな添え触れを申請した。

蝦夷地旅行の「添え触れ」を貰わなくては、

宿舎、人馬の調達ができない。これら役人達は蝦夷地取締御用掛の現地役人で、江戸からの指示により幕府の蝦夷地経営を直接担当していた。

建設担当の普請方から警備担当の同心まで揃っていた。一日も早い測量許可と添え触れの交付を期待して、これらすべてに挨拶してまわった。届出の文面は次の通り。

書付を以って申し上げ候

私儀先月一九日江戸表出立、当月一〇日津軽領三厩え着、一日より一八日まで風待ちちつかまつり候て、一九日渡海仕り候ところ、風宜しからず、松前領吉岡村え漸く着船、一九日二〇日まで風待ち仕り候えども、函館渡海相成り申さず候に付き、よんどころ無く陸路をまかりこし、当日到着仕り候、右御届け申し上げ奉り候

申五月二二日

蝦夷御掛 御役人中 様

伊能勘解由

それから蝦夷地御用の商人達の会所に立ち寄った。御用商人は栖原屋庄兵衛、平岩屋平八、村山傳兵衛、伊達屋林右衛門であった。

また、函館の一里手前の亀田村に目付の三橋藤右衛門の役所があった。函館役所に提出した届けと同文の書付を差し出した。

目付はれっきとした旗本である。幕府の制度では重要な施策には必ず目付が同席したから、蝦夷地にも目付として三橋が派遣され、函館の近くに役所(役宅)を構え蝦夷地経営を監察していた。書付は用人の大塚一郎、武藤貫蔵に渡された。三橋からは後刻、家臣の鶴沢幾太を忠敬の宿舎へ見

舞いに遣わされた。

下僕・長助暇をとる 一日も早い出発を望んだが、出かけることが出来たのは六月一日だった。

二三・二四日逗留、曇天あるいは小雨で天候は不良だった。二五日も同様だったが、この朝、下僕の長助が病気なので暇をくれと言い出す。

「旦那様、これまで色々お世話になって申し訳ありませんが、体の具合が悪いので、この先のお供は出来かねます。ここでお暇をいただきとうございます」

「何でまた急なことをいう。見たところ何でもないようだが?」

「無理してお供しておりますが、調子が悪くて、この先二百里もお供できそうにありません」

「皆一緒に歩くのだよ。何とかなるよ。お前がいなくなると他の者の負担が増える。思いとどまらないか」「給金の不満か」

「減相ありません。よくして戴いております。この上、ご迷惑をかけてはいけませんので、ただただお暇が戴きたいのです」

長助は慰留を聞かなかった。荷物運びの人足たちには江戸の話をした見返りに、蝦夷地の話を色々聞き込み、人足どもが語る根室や国後の噂話にお届け付いたようだ。

まともに戻れなかった旅行者の話などを吹き込まれていたかも知れない。津軽海峡渡海以来の難渋、不順な天候などのため、伊能隊は無事に戻れないと思ひ込んだのだろう。ただただ暇を求めていた。

「暇を出しても、江戸は海を越えて二五〇里の先だぞ。独りで帰りつけるかどうか分からないぞ」



「旦那様、御心配ありがとうございます。通って来た道です。何とかなると思います。ただ、戴いた支度金と給金は使ってしまったので、お返しすることは出来ません。ただただ、申し訳ありませんが御勘弁をお願いします」

長助も忠敬が見込んで連れてきたシツカリ者だった。蝦夷地から分かれて、独り江戸へ戻る手立ても考えた上の申し出であった。今後の見通しについて意見を持った上の暇願いではいたし方ない。「どうしても帰るか」

「勝手を申し上げて恐れいますが、お許しをお願いします」

「たつて、というなら致し方あるまい」「お役所にもお届けして永の暇をとらせよう」「ここから三厩までの乗り合い船があるという。船賃を渡そう。路銀の足しに金一分を用立てるが、それでどうか」「ありがとうございます。下郎めの勝手な行いに対し御高配、心から御礼申し上げます。測量の成功をお祈り申し上げます」

「ありがとうございます。道中、気をつけてな。達者で暮せよ」

長助も若干の小遣い銭は持っていたと思うが、路用一分を貸与というところが気になる。千住から三厩まで測量隊は一日に一〇里余歩いて二〇泊している。長助は体一っだから、二割以上短縮できるだろうが、いそいそでも一五泊くらい必要だった。

一両を五〇〇文とすると、金一分は一二五〇文、一五泊で割ると一泊八〇文余、下僕の宿なら十分泊まれるが、余りもしない額だった。晩酌は出来ない位だろう。

金一両を現代のお金になおした場合、二〇万く

らいだという。すると一分は五万円。一五泊では一泊三四〇〇円で、カプセルホテルかユースホステル級となるが、当時の宿は相部屋が普通だったからおかしくはない。

忠敬は大旦那だったが金銭感覚はシャープだった。長助のその後は分かっている。

五月二七日亀田のお目付役所に出発届け二八日函館役所にも届けて、蝦夷地旅行の「添え触れ」をいただき、「添え触れ写し」を添付して、函館よりクナシリまでの村々、場所々名主・支配人あてに、忠敬自身の泊まり触れを送った。与えられた安い賃金の人馬は馬一匹、人足三人だった。蝦夷の駅馬が少ないので一匹減らされた。

奥書で函館村月番の村役人二名が連署押印して「伊能様御先触れのとおり、村々継ぎ送り、御逗留なられる筈だから、先々へ送るよう」と記し沿道に指示した。

二八日は晴天。江戸出発以来の上天気だった。函館山に登り、下北半島の山々など諸方の目標の方位を測る。これはラッキーだった。蝦夷地と奥州との関係位置は海峡を挟んだ方位測定で定められたから、函館山の観測は大きな役割を果たしている。山頂のケーブルカー駅の壁に記念のレリーフがある。

二九日ようやく函館を出発、約五里の大野村に向かう。陽暦に直すと七月二〇日。酷暑で大変な日だった。師匠の高橋至時との取り決めで、蝦夷地は歩測をやめ、間縄を張ることになっていたのだ。函館から始めたが時間がかかり、途中で日が傾いてきたので取りやめ、これまで同様に歩測で大野村までを測る。

早くも断念であるが、三厩で九日、函館までの

道中で五日、函館役所との折衝に七日、合せて二日を測量以外の用務に費やしていた。前途は約一六〇〇キロ。どんなに急いでも三ヶ月はかかるだろう、寒さとの闘いになる。忠敬は、もたもたしてはいられなかった。半日試みた上で、すぐ決断した。

あるいは、間縄使用を取りやめるために測ってみた、といった方が本音かも知れない。実際には根室近くのニシベツまで行つて、函館に引き返すまで一〇一日かかっている。日記には出てこないが、忠敬はここで、もう一つ決断をしている。

遠路はるばる運んできた大方位盤を函館に残したことである。精度は高いが設定に時間がかかり、能率が悪いというのだが、のちに師匠・高橋至時と論争になっている。高橋は「僅かの費えを惜しんだ」といい、「忠敬は小方位盤（杖先磁石）で充分だ」という。師匠と忠敬は論争したことは無いが、こればかりは議論になっている。筆者は、おかれた環境の下での決定としては忠敬に分があると思う。



函館山展望台のレリーフ  
伊能忠敬北海道最初の測量地  
「土用朝五つ迄曇る。夫より晴天、江戸  
出立後の上天気なり、併し山々白雲おほ  
し、箱館山に登て所々の方位を測、夜も  
晴測量」 昭和32年4月 函館市



[illegible]

浮龍三事之文、  
浮龍御解衣  
中五十一歲  
當解御衣還川  
里江都、佳者  
仕在月外

尺寸を測りて深きを爲すに用ひては、  
 二日十寸、  
 言、舊、川、なる所、  
 石、路、に、測、器、之、寸、相、泥、一、相、幸、二、日、於、此、山、頂、に、主、爲、  
 一、寸、以上、を、く、り、ん、  
 主、爲、  
 浮、施、如、解、由、主、所、并、所、持、測、器、之、覺、見、書、  
 同、表、  
 西、北、序、山、能、建、義、  
 津、用、山、城、守、知、行、所、  
 中、德、園、書、部、  
 信、五、村、書、目、

銅勒小道長湖	取解十二相成此改比主客了以
一側食定分儀	但全倚直爾位三
一星鏡	長七尺八寸
但臺階	一
一同	長五尺
一望遠鏡	長三尺
一同	長二尺四寸
一方位盤	徑一尺二寸
一間槓	長二間
一間繩	長五十間
石三四角量地相用器	二節

一 同	但裏鋪板 長二尺二寸	一 器
一 圭表儀	高一丈二尺八寸	一 器
但圭盤長四間半 景符圭尺 表尺水盤半	小通尺全備 并面裏面附	
一 空搖球儀	但全條裏鋪位立	一 器
一 子午線儀	但裏表高一丈一尺 經表高五尺五寸	一 器
銅物小通尺附		
一 同	但長表高七尺	一 器
	經表高同三尺五寸	
	一 器	

国宝・伊能忠敬測量日記 第一巻 第1頁～第5頁



# ― 銚子測量 ― 富士山の方位測量の地

犬若岬今昔

宮内 敏

伊能忠敬の時代「銚子から富士山が見えることを江戸庶民は知っていたか」と聞かれることがある。

それというのも現在銚子から富士山が見える日は多くないからである。快晴でも霧でみえない。秋から冬場にかけての早朝か夕方がい。地元の漁師に聞くと西風の強い日がベストという。

伊能測量隊が銚子へ来たのは新暦の八月二六日である。九日間滞在して富士山の方位測量に成功している。現在の感覚から察すると、その時期では、一ヶ月滞在したとしても成功の保証はない。

伊能測量隊は幕府天文方高橋至時より「房総半島突端の洲崎（館山市）や東端の地銚子では必ず

富士山の方位測量をせよ」との指示を受けていたと推測出来る。とすれば富士山は今よりずっと見え安かったに違いない。だからこそ高橋は指示を出せし、伊能測量隊は銚子測量が完了した後も、東下村（現茨城県神栖市波崎）まで測量しながら銚子で待つことができたと考えられる。

当時、銚子・佐原は水運で江戸と繋がっており銚子の情報は日を置かず江戸に伝わっていた。（会報・伊能忠敬研究 第六九号より参照）

高橋は富士山目視の可能性をよく承知したうえで指示を出したと推測される。

忠敬は佐原・潮来周辺で日常的に富士山を見ていたと思われる。銚子での富士山可視情報は忠敬が高橋に与えたものかも知れない。

当時、銚子は下総随一の景勝地で、幕末から明治にかけて江戸からの物見遊山客は多かった。

香取・鹿島・息栖の「三社詣出」や「銚子濱磯巡り観光」として広く知られており文人墨客も多く訪れている。

そこで富士山の方位測量の地犬若岬に関わる絵図等から一八〇一年の伊能忠敬銚子測量当時の犬若岬周辺の状況を考察してみたい。

## 六十余州名所図絵 下総銚子の濱 外浦

初代 歌川広重 作

日本全国の名所を浮世絵木版画六九枚にまとめた連作で「下総銚子の濱外浦」はその一枚である。

一八五三（嘉永六）年〜一八五六（安政三）年の作

外浦とは現銚子市外川のこと、絵図手前の砂浜は外川の浜である。現在、外川漁港として整備され砂浜はほとんど残っていない。

浮世絵は縦方向に強調表現されており写真というよりイメージを重視している。そのため写真との比較は難しいが当時の情景はよく伝わってくる。

右手の断崖は屏風ヶ浦で先端は刑部岬（現旭市）である。帆船の浮かぶ名洗いの海は遠浅で穏やかな海に描かれている。左手の岩は千騎ヶ岩（せんがいわ）とある。絵図右下の岩礁は位置関係から犬若岬に続く岩礁であろう。手前の砂浜には女性二名を含む磯巡り観光客が、波間の小船にも見物客らしき人物が描かれている。

上部中央付近には富士山がしっかりと描かれていて、その方向もほぼ正確である。富士山方向は忠敬の出生地（九十九里町）で富士山の右手の山並みは丹沢方面、左手は勝浦（外房）方面になる。

背景の空が茜色に染まっているのでおそらく夕景をイメージしていると思われる。その場合、シ



六十余州名所図会 下総 銚子の濱 外浦

初代 歌川広重 作

船橋市西図書館 所蔵

嘉永6年（1853）／縦38cm×横26cm





外川浦犬若の図：圓福寺（銚子市）所蔵、慶需雙林写とある。

ルエットとして山は黒つぶく見えるのだが、白で象徴的に描いている。  
海の色、漁船、見物の船影や海岸の人影から実際は穏やかな日中を描いたと思われる。

**外川浦犬若の図（左上図）**  
銚子磯巡り名所（観音図、川口之図、目戸ヶ鼻日出之図、目戸ヶ鼻裏見図、鷹石之図、海鹿島之図、石切之図、長崎之図、犬若之図、本城雪之図）の一枚。  
この図の製作年は不明だが十枚の図の風景から幕末のころと推測される。



下総国海上郡銚子飯沼山観音之図：圓福寺（銚子市）所蔵

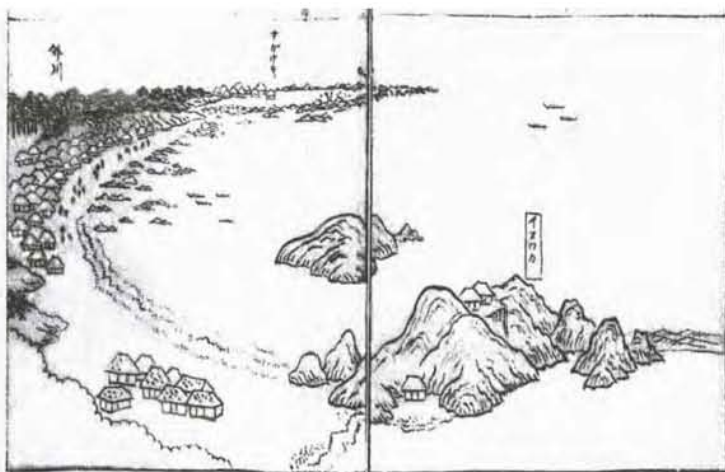
岩や岬などは縦方向に誇張が見られる。中央の大岩は千騎ヶ岩である。その右に犬若岬が描かれており台地には立派な家がある。その先に富士山が白く大きくかかっている。沖合に帆船も見える。右側には屏風ヶ浦が描かれている。手前の外川の海は波荒く、海岸には大勢の観光客が描かれている。拡大してみると犬若岬の台地の両端まで続いている。富士山見物のためである。当時、犬若岬の台地が富士見の名所であったことが窺える。今、地元では「本家の台（ほんけの台）」と呼ばれているが、昔「富士見台と言った」とも聞いた。



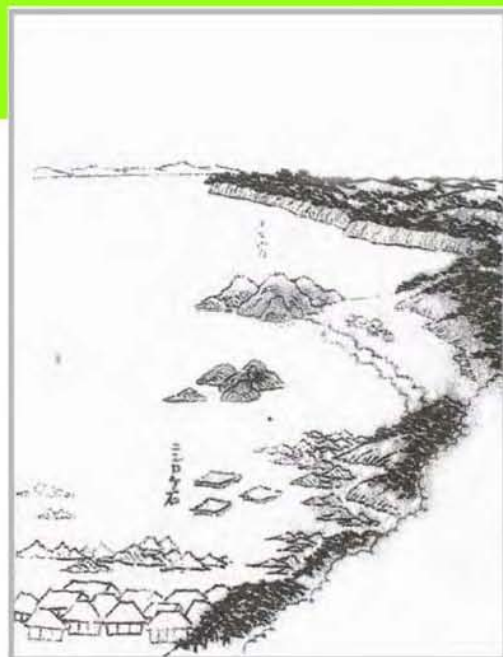
飯沼村浜通り周辺の景観（明治20年）  
筑波大学歴史地理調査報告8号P36図の部分に加筆

**下総国海上郡銚子飯沼山観音之図（左中図）**  
絵図中の朱塗りの建て物は飯沼観音で、右に五重の塔が描かれている。手前の海岸には納屋等が描かれている。当時、観音周辺は関東有数の繁華街であった。忠敬らはここから数百メートル離れた田中吉之丞宅（田中玄蕃新宅）に九日間滞在した。佐原からの見舞客は船で玄蕃（げんば）河岸から上陸したと考えられる。  
飯沼観音は銚子磯巡り観光の出発点である。ここより浅間神社・和田不動・川口神社・千人塚・目戸鼻・黒生・アシカ島・犬吠埼・長崎鼻・千騎ヶ岩・犬若・高神明神・名洗浦を経て飯沼観音に戻って終わる。（赤松宗旦著 利根川図志による）





下総名勝図絵：犬若から長崎方面の鳥瞰図（宮負定雄）  
銚子市公正図書館所蔵



下総名勝図絵（宮負定雄）  
長崎・外川方面から屏風ヶ浦方面を臨む鳥瞰図  
銚子市公正図書館所蔵

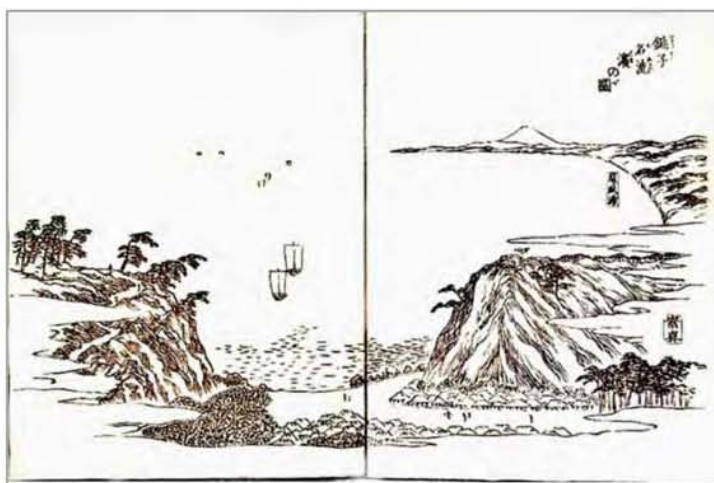


利根川図志：銚子浦犬若嶋千騎岩之図（赤松宗旦）  
銚子市公正図書館所蔵

長崎・外川・犬若・屏風ヶ浦（右上）  
中央に犬若岬、右上部に屏風ヶ浦、手前の集落は外川・長崎と思われる。洋上の山並みに富士山らしき山はない。左上隅で枠外となったのである。屏風ヶ浦は情景がよく出ている。

犬若から長崎方面の鳥瞰図（左上）  
右が犬若岬、中央の岩が千騎ヶ岩、上部の岬が長崎鼻、左の民家は外川の集落である。

利根川図志・銚子浦犬若嶋千騎岩之図（左中）  
右手前の犬若岬には道があり富士見客であろうか歩行者も描かれている。台地の奥に見え難いが、民家がある。左の大岩は千騎ヶ岩である。



利根川図志：銚子名洗濱之図（赤松宗旦）  
銚子市公正図書館所蔵

利根川図志・銚子名洗濱之図（左下）  
手前の名洗集落に続く屏風ヶ浦の先に富士山が描かれている。名洗海岸から富士山は見えないが犬若から名洗に向かう山道から名洗集落と富士山を見ることが出来る。図は富士山の位置関係も含めて、ほぼ正確である。

宮負定雄（みやおい・やすお）  
寛政九年（一七九七）～一八五八）  
江戸時代の国学者。通称 佐平。雅号 亀齡道人  
下総国香取郡松沢村（旭市）、二九歳で平田塾に入門。  
三十歳のときに「農業要集」を平田塾より出版。  
赤松宗旦（あかまつ・そうたん）  
文化三年（一八〇六）～一八六二）  
江戸時代後期の医師、地誌学者。下総相馬郡布川村。  
『利根川図志』は流域の社寺名所旧跡を紹介している。



銚子犬若岬・石井柏亭画（左絵図）

（伊能忠敬隊富士山測量の地）

石井柏亭著「行旅」によると「銚子へは九度行っているが犬若には大正二年春、太平洋畫会の人達と畫を描く目的ではじめて犬若へ行った」と記している。

絵は写実的で伊能忠敬測量隊が富士山の方位測量をした台地に昇る立派な道が描かれている。台地の左手に倉が、右手に大きな母屋が、台地下の右手奥に犬岩が描かれている。その前は船溜まりに見える。

台地の右側には地質むき出しの赤茶けた絶壁が象徴的に描かれている。この崖はかつて犬若岬か



石井柏亭画：銚子市犬若岬（大正2年）越川行雄氏 所蔵



現在の犬若岬（犬岩が上図（柏亭画）と同じに見える位置で撮影）

ら刑部岬（旭市）まで連続して繋がる海食崖（屏風ヶ浦）であった。現在、海食がさらに進んだ結果、崖は名洗・犬若地区の一部で消滅している。銚子測量（一八〇一年）以降にも何度も地震、津波があった。絵から海食が進行中なのが分かる。絵中の手前の遠浅の海は大正・昭和時代、海水浴場として賑わっていた。筆者も子供の頃よく来た覚えがある。今は、犬岩前から船溜まり、崖下、砂浜まで埋め立てられ（左下図黄色部分）犬若港やマリナーができていて昔の面影は全くない。（石井柏亭画と左の写真と比較）

海面が今より高かった時代、犬若岬は島であったであろうか。



国土地理院：ウォッチず「銚子部分」に加筆

現在の犬若は人工的に何もしていなければ外川の海岸方向に浸食が進み犬若島を形成するように見えるが、逆に島であった犬若島が犬若島自身や千騎ヶ岩が突堤となって砂が付き、再度陸地に繋がりが現在の犬若岬になったようにも見える。

前出の赤松宗旦・利根川図志では「銚子浦犬若嶋千騎岩之図」となっているのが面白い。

吉田初三郎画の二つの鳥瞰図（次ページ）の犬若部分図も島を連想させる描き方になっている。



下総名勝図絵二点（前々頁）の犬若岬はかなり大きく描かれている。

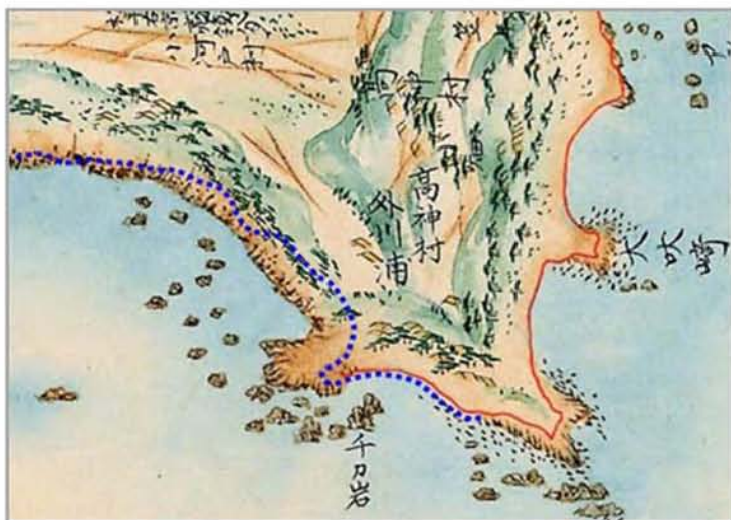
伊能大図「銚子部分」（左）における犬若岬も国土地理院地図や明治十七年の迅速測図の海岸線（左図青点線）と比較すると、かなり大きく描かれているのが分かる。

伊能大図「銚子部分」では岩礁まで描いたと推定してもかなり大きい。

伊能測量隊は岬の回りや屏風ヶ浦方面は測量していない。未測部分は目測や地元での聞き取りを下にしてスケッチしたと思われる。

銚子半島の伊能図で見る限り、実測していない岬周辺や岩礁は大きく描いている。

当時、銚子は磯巡り観光で知られており、それ



伊能大図「銚子半島部分」に迅速測図の海岸線（青点線）を加筆

ぞれの岬は観光地であった。強く意識された岬等  
は大きく描いたのだろう。しかし、それらを考慮  
しても忠敬時代の犬若岬は現在想像するよりかな  
り大きかったのかも知れない。

犬若岬を**大若山**と記述している文面があった。

果たして台地を単に山と呼んだのであろうか。

下総名勝図絵の二点（前々頁）の犬若岬は山を  
連想させる描き方である。

硬い岩盤上に堆積した地層の犬若岬は海食の過  
程で一時、山状になったことがなかったであろ  
うか。山が更なる海食により石井柏亭画に見られ  
る断崖となり、岩礁を海に残したとも想像できる。  
学問的に解明されることを期待したい。

下総名勝図絵は地元での聞き取りや残された岩  
礁からイメージされた絵であろう。

現在の犬若岬（前頁左中の写真）

台地には建物等の構造物は何もない。水難の碑  
が一つあるのみである。石井柏亭画などに見られ  
る台地への立派な道もなく、台地へは民家裏の細  
い小道を登るしかない。柏亭画に見られる絶壁は  
崩れ落ち台地全体が植物で覆われている。これは、  
周囲が埋め立てられたため海食が止まったためで  
あろう。柏亭画に見られる美しい景観は一変して  
いる。唯一、犬若だけが昔の姿を残している。

（注）犬若の象徴犬岩は千葉県で最も古い一億五  
千年前の中生代ジュラ紀の地質持っている。また、  
犬岩は義経の愛犬に纏わる伝説の岩でもある。

吉田初三郎画

「大銚子遊覧鳥瞰図絵」東半部分（下図） 大正期  
「銚子市鳥瞰図」犬若部分拡大（次頁左上） 昭和期

（外川ミニ資料館所蔵）

吉田初三郎は、  
大正十一年に  
「大銚子遊覧鳥  
瞰図絵」を描  
いている。

この絵には明  
治三三年開通の  
総武線と現銚子  
電気鉄道が描か  
れている。

昭和八年開通  
の佐松線（現成  
田線）はない。

大正期に描か  
れた「大銚子遊  
覧鳥瞰図絵」の  
犬若岬は全体  
的に大きく、台  
地は二段になっ  
ていている。

台地前方には  
富士山が描かれ  
ている。

褐色の崖は少な  
く側面は緑で覆  
われている。



吉田初三郎画：大銚子鳥瞰図絵より左半部分、中央上部に犬若岬と富士山が描かれている：大正11年





吉田初三郎画：銚子市鳥瞰図より犬若部分拡大図：昭和十年代か犬若岬の前方（上図枠外上部右）に富士山が描かれている。

昭和期に書かれた「銚子市鳥瞰図」の全体図には現成田線が描かれているので昭和十年代初頭と推定出来る。大正期に描かれた鳥瞰図と比較すると、北側の崖（絵右側）には緑がほとんどない。大正期より海食がさらに進行した結果であろう。鳥瞰図は大正、昭和期とも富士山が描かれており、台地に向う立派な道がある。絵を拡大して見ると台地には石垣が回っており建物らしきものがある。富士山のポイントであったことが分る。二つの鳥瞰図とも犬若岬が、かつて島であったかのような描き方になっているのが興味深い。図中の犬岩の形もおもしろい。

吉田初三郎…一八八四～一九五五年

大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師。



於：銚子市犬若岬(伊能忠敬測量隊富士山の方位測量地点) 撮影:2013/12/22

### 伊能隊富士山観測地点からの富士山

左の写真は犬若岬の台地から撮影した。夕景(日没後)である。肉眼でもほぼ同形にみえる。屏風ヶ浦の先端刑部岬の左方に富士山が見える。望遠で覗くと富士山の形状をはっきり見ることができる。忠敬の頃に比べ犬若岬の外観は大きく変わったが台地からの眺めは同じであろう。(手前の黒く伸びた防波堤は最近作られたもの)



石切之図(犬吠埼): 圓福寺(銚子)所蔵



君ガ浜から犬吠埼灯台を臨む

おわりに  
銚子は江戸・明治時期は水運で鉄道開通後は鉄道で江戸(東京)からの格好の観光地となった。絵図を眺めていると当時の美しい銚子の景観が浮かんでくる。銚子が江戸まで知られた観光名所であったことが絵図からも容易に伝わってくる。富士山測量の犬若岬ほどの絵図にも大きく描かれていて岬の前方に富士山がある。広重画の磯巡り客には女性の姿も見られる。犬若岬が富士見台として庶民にまで広く知られていた証拠であろう。忠敬時代①銚子から富士山を年間を通して(見え難い季節を除く)ほぼ見ることができた。②伊能図に見られる大きな犬若岬もそれなりに大きかった」と推測される。

石切之図…灯台設置前の犬吠は石切場として知られた。図中、磯巡り客が君ガ浜から石切場の上まで続いている。ここは今も昔も初日之出のポイントである。

犬吠埼灯台…明治七年、英国人の設計により造られた。



## 出雲市 手銭家文書の紹介

渡辺 一郎

最近の読売新聞全国版で、幾つかの地元伊能測量対史料を紹介されたが、そのなかに、出雲市の手銭家文書が紹介されている。この文書は平成二二年の伊能図松江フロア展の際に、訪問調査させていただいたもので紹介する。

同じような文書は、各地に残されている筈で、我々の知らないものも多数あると思われる。伊能測量の実態を現場から浮かび上がらせる貴重な史料なので、発掘に努めて欲しいと思う

### 文化二年 事前手配の覚え

忠敬が幕臣となり、幕府測量隊を組織して初めての測量だった第五次測量では紀伊半島などに手間取り、予定した山陰では寒くなってしまうので、山陽にルート変更された。しかしながら、幕府勘定奉行の通達を受けた山陰道では、着々と事前準備が進められていた。

島根県出雲市大社町杵築の元大庄屋手銭家の御



用留のなかにはつきりと記されている。

測量隊の出発は文化二年（一八〇五）二月だったが、御用留めは正月吉日であり、出発の遙か前に松江藩から通達されていたことが分かる。忠敬の泊まり触れは出発直前しか発出出来ないから、この手配は、勘定奉行↓松江藩の江戸留守居役↓国元への領主使↓郡方の順に指示されたものである。原文の要点を紹介する。

文化二年（一八〇五）御用留 正月吉日

#### 手配の覚

測量隊メンバー

天文方高橋作左衛門殿 御手付 伊能勘解由

作左衛門殿 弟 高橋善助

天文方下役 坂部貞兵衛

市野金助

外二（伊能勘解由の）内弟子 四人

六人

供の者下部等 都合拾四人

右天文方御役人が、測量御用で当秋ころ、伯耆から松江に来て、宍道湖を測り、隠岐もすべて測ってから一旦松江に戻り、石見へ向かうと聞いている。伯耆に入られたら、村役人を遣わして、取り扱いの様子を聞き取り、段取りを指示することとする。（勘定奉行の）お証文で指示されている人馬は次のとおりなので申し付けて置く。

一、人足一人 馬二頭 勘解由（旅行用の人馬の支給である）

一、馬三頭 善助、貞兵衛、金助（下役は各一頭あて支給）

一、人足六人、および長持一棹持人、馬一頭（人

足六人と馬一頭は測量機器運搬用、長持は、書類運搬用で通常四人、）

一、宿泊、食事などは、公用旅行につき、規定の木銭、米代を、御払になります。（米代はところの相場で、一人一日五合の割合で支払い、木銭は場所毎にさだめられていた。安い料金だった）

一、御賄の責任者に清水藤八が、下役に山根藤右衛門が命じられたので、賄いのことは兩人から手配する。

一、郷方吟味役が一人、出張するよう命じられました。

一、郡足軽も一人出張し、宿泊所に詰めて心使いをするよう命じられました。村役人も宿舎に詰めて諸事取り計らうようにと指示されました。

一、測量道具の修繕などが必要な場合、大工、鍛冶屋が必要とのことなので、手配しておくこと。もし出来ない場合は松江から呼び寄せる段取りになっている。

一、順村先より江戸の天文方へ御用状を出されるときは、其所役人より直飛脚で指定された場所に差し出すように。江戸から測量先への御用状は、廻村先へ飛脚を以て届ける。

一、通行筋の宿泊、昼休み場所などはまだ分からないが、泊り所は広い家二軒を用意する。海岸などは（大きい家がないので）三軒ほど用意すること。

傷んでいる場所は修理し、湯殿、雪隠が無いところでは仮にこしらえる。昼休み場所も綺麗な家を一軒用意する。海岸では二軒になってもいいが、障子を張り替え、掃除をしておくように。修理費用は支給されるので、書き出すこと。街道筋の他の様子は判り次第お知らせする。



一、川を渡る場所へは、庄屋年寄が人夫を召連れて出役し、手配すること。

一、道筋案内については、伊能勘解由殿、高橋善助殿には、村ごとに村役人の一人が付き添って案内すること。為助■左衛門と与頭の内一人郡中相隨うこと。

一、人馬は泊場所から次の泊場所まで同じ人馬の通しとし、元気な者に、見苦しくない衣装支度で差し出すこと。

一、荷物には荷札をつけ、入り混じったり、紛失しないよう扱うこと。

一、通行筋の村々では用心のため、村役人が人足

二・三人程召連れて出役し整理にあたること。夜に入る場所では松明を差し出すこと。

一、料理については、一汁二菜くらいと聞こえているが、伯耆の様子により変わることもあり得る。心得として知らせておく。

一、宿泊、昼休み場所では、子供に袴を着用させて給仕を勤めさせる。

(大人は物陰にいて、子供に教えて、給仕させる例は各地で見られるが、理由は良く分からない。粗相があったとき、大人では引つ込みがつかないが、子供なら詫びて済むといわれるが。)

一、泊場所では宿主の家の提灯を出すこと。

一、天文方の上下の者から買い調えたい品物の、希望を聞いたときは、その場所の相場で売り渡すこと。

一、泊まりの宿々には湯桶手水たらい等用意すること。

一、宿々には刀懸けを用意すること。

一、(到着のとき)宿の亭主は袴を着用し、二三人丁程迎二罷出て、御宿何郡何村誰と書いた手札を

差出すこと。

一、宿々で米代、木錢等を受け取った際に、受取書希望されたら、丁寧に書いて差し出すこと。

一、測量の作業中、湖水の水辺で何かあった場合は、何処へ向かう船であっても、現場急行を命じること。

右のとおりなので、万々行き違いの無いように手配すること。この他の手配のことがあれば、追々申しつけるのでよろしく。

六月二十八日

松山安左衛門

大国為助殿

木村度右衛門殿

十人当テ

公儀天文方御役人の順国について、近々こちら

にもお出でになるとのことである。右について賄方が扱う入用品のなかで、夜具と宿舎に必要な諸道具類は(借り上げて)郷中持廻りにしたい旨、別紙のように賄方より要望書が出された。

そこで(借用品の)損料、借用料を見積もりして差し出すように指示されたので、入念に借用料の見積もりをおこない提出してください。

もつとも、賄い方でも見積もりをおこないますので、御承知ください。以上

松山安左衛門

六月二十八日

下郡兩人

与頭六人 八人当テ

注

傍線を付けた部分は管見では初めての、珍しい記事である。

松山安左衛門は松江藩の郡奉行。下郡(したごおり)と与頭(くみがしら)は郡村内の農民身分の役人である。与頭は他藩でいえば大庄屋に相当する地位で、上役の下郡の補佐をする。与頭として実績と経験を積み、空きが出れば下郡になるというシステムでした。富農が勤めており、下郡、与頭とも殆ど世襲で名字帯刀を許されていました。

各郡に下郡一人、与頭二人が置かれ、与頭の担当区域は、郡域を南北に分け夫々一〇〜二〇ヶ村程度でしたが、出雲大社を含んでいる神門郡だけは与頭が六人いました。また大社では、与頭と各村を統轄する「年寄」の間に「大年寄」が置かれていました。

手錢家は、この「大年寄」を務めており、統轄していたのは杵築六ヶ村で、やはり名字帯刀を許されていました。大社は特別な土地で人口も多かったようですし、手錢家の婚姻や養子縁組の相手先を見ると与頭、下郡を勤めていた家が続いていることから、大社の「大年寄」という地位は殆ど与頭と対等なものだったようです。文書から推察すると、「大国為助」「木村度右衛門」は往来方を勤めていた藩士と思われる。十人当てとは、大国、木村、下郡二人、与頭六人の合わせて一〇人に宛てた書状という意味です。八人当ては、下郡二人与頭六人をさします。

(村方の職制については、手錢記念館・佐々木学芸員による)



天文方御役人の順国につき、賄方で入用の諸道具等の損料の見積書の提出に關し、別紙のように申入れられたので御承知下さい。しかしながら、万一、郡の都合で命じられた損料に損失が出ますと、郡の難渋になりますので、能々考えて損失が出ないよう見積書をお出し下さい。ただ、急用なので、早々に差出すようにしてください。以上

六月二十九日

松浦 ■藏

岡 惣助

山本 喜惣

中尾信四郎

下郡兩人

与頭六人 八人当て

文化三年 寅八月

天文方衆御越の節、諸飛脚御雇人書出し並びに、漕船賃錢諸買物月番所入用書出し 杵築控

伊能隊は、山陰の冬を避けて、文化二年は山陽道沿いを測っていたが、文化三年は山陰地方に廻って来る。残念ながら忠敬は、文化三年四月二九日山口県の秋穂浦で持病の瘧（おこり）を發して療養のため作業の指導ができなかった。八月六日まで下役・内弟子のみで測量がおこなわれる。

手銭家の一連の伊能測



量文書のなかに、忠敬不在であるが、人足、飛脚の運用や手当の支払いなど、生々しく現場支援の実態を彷彿させる資料が含まれているので、理解できる部分を拾いながら紹介する。

出雲市杵築の資料なので、この周辺が舞台であるが、関係地域の位置関係は地図により御判断願いたい。

一、同百八十文 惣八 夜通し

七月二十七日北荒木 夫より村々打廻り 武志まで七ヶ村打廻り一人賃錢

二七日は杵築宿泊の三日前である。人足の動員計画、役割分担、責任者など全ての段取りが終了している筈である。当日、途中に出しておく連絡員（レポ）が次々に持ち帰る情報を聞いて、測量支援作戦の開始を命じればよいところまで固まっていたと思われる。

三日前の夜、急使を派遣して知らせねばならない内容は、多分、状況が変わって、人足の動員計画の変更があったのだろう。書面で渡されたかもしれない。

北荒木と武志の距離は伊能大図でみると一〇キロくらいなので、昔の人の足なら、どうということはないが、夜道で提灯を下げて走るのである。普通なら二人役である。しっかりと村人に命じたのであろうか。

一、同一貫文 金次、口藤右衛門

七月二十七日□つ時、楯縫郡魚瀬浦に至る急飛脚、夜通し二人。翌二十八日昼時頃二始ル。

一人へ五百文づゝ。但し此飛脚、至て達者成もの撰差出候様被仰遣、則御用首尾能相済、御ほめ

も有之候由

またまた急飛脚である。魚瀬浦は二七日の測量隊宿泊地であるから、二八日の手配に關する緊急連絡と思われる。文脈からは藩の指示である。達者な者を選べと言われ、無事に役割を果たして褒められたというから、大切な連絡（ツナギ）だったに違いない。賃錢も一人五百文で、二人役だから、前項の武志行きとは格段に違っている。

内容は憶測であるが、魚瀬浦には測量班三班が泊まっていたから、そこから一番遠い杵築寄りの測量開始地点の変更、あるいは人足数の変更だったような気がする。

翌二八日昼時頃始まる、という文言が気になるが、測量は原則として夜明けとともに始められた。昼ごろ始めるといふようなことは考え難いが、そうだったかも知れない。その他、二七日の夜に、次の五つの方向に夜通しの飛脚が出されている。

一、錢百八十文 七藏、藤藏。七月二十七日夜通し 鷺（浦）行二人

一、同百六十文（越南ノ）太七。七月二十七日夜通し 入南より遙堪行二人

一、同二百四十文（越ノ）庄四郎、助七。七月二十七日夜通し 知井宮行二人

一、同百六十文（越北ノ）太七。夜通し七月二十七日中荒木よりあき

一、六百文 赤文五郎。原浜入南まで村々打廻り二人

色々考えても人足の配置が変更になつて、二八日の動員のための緊急連絡のような気がする。そして次に二七日夜通しで、与頭の為右衛門が駕籠で猪目浦に向かう駕籠人足が手配される。

猪目浦は二八日の伊能隊宿泊地である。為右衛



門は多分地元の村側の責任者であろう。夜道をかけて現場に急行するのは、日程が繰り上がった可能性が大きい。

一、南木市四十文（見せ消し）（一ノ）善十、口藤右衛門。（大ノ）庄次郎 七月二十七日夜通し、

与頭為右衛門様猪目浦へ御越の節駕人足四人、賃銭一人二付 百五十文づゝ、

一、南市五十文 喜代松。右の節御荷物、其外物書中 荷物おひ参る人足一人

一、百二十文 （赤ノ）長右衛門。七月二十八日白米二斗おひ、鷺浦行一人

与頭に書類持ちが付いてゆき、翌日は食糧として白米二斗を運搬する。白米二斗は四〇人日分の食糧に相当する。二八日には引き続き、同じ与頭の市郎右衛門の荷物運び、藩士の大国為助の荷物運びが動き、二八日の飛脚が出る。こちらは予定どおりらしく昼間だった。

一、同百二十文 栄四郎。七月二十八日菱根、遙堪、常松、栗津、堀江五ヶ村打廻り一人

一、同百四十文（中ノ）直十。七月二十八日 遙堪、入南、大塚、小山打廻り飛脚 階具わり

の由（階具の意味不明だが、道具持ちなどの役割分担か）

一、同百二十文（一ノ）善十。七月二十八日猪目浦添人の由（意味不明だが、添人として派遣）

一、同八貫文 七月二十八日昼時より 八月朔日昼時より 焚天持の由 鷺浦より申来り遣ス

猪ノ目より参 夫より浦々付廻り御碇（日の御崎）より戻り 賃銭如此 一人二付四百文づゝ、

七月二十八日、翌八月一日に焚天持ち人足の派遣を要請され、猪ノ目から日御崎まで、浦々を付き廻らせる。一人四百文なので、二〇人動員されたことになる。昼時よりは意味不明。測量隊は原則として夜明けとともに作業開始した。

一、同一貫六百文 七月晦日夜より手配致候人夫四十人養料一人二付 四十文づつ遣し候

七月晦日夜より手配した人足四〇人が不要になったので、キャンセル料を四〇文づつ渡している。

八月朔日、日御碇から杵築え舟で来て、揚陸後すぐ測量を始める予定だったが取りやめになったらしい。こういうことは地元迷惑をかけるが、ありうることだった。綱紀が緩んでいた結果かも知れない。

一、同百二十文（越ノ）市郎右衛門。八月朔日、日御碇行一人（連絡便か）

一、同六十文（越ノ）忠兵衛。八月朔日 中あらき、北あらき、茅原打廻り一人（村々へ連絡）

一、同四百文（市ノ）与八、林助、和三郎、林太、藤七 此五人の者。八月朔日中山まで遣ス

焚天持入用の由万屋より御指図二付遣 一人二付八十文づゝ（焚天持ち要員の派遣）

一、同百二十文（赤ノ）弥三郎。八月朔日御碇行一人（連絡便か。測量班は三班行動中）

一、同二百四十文（市ノ）与八、源右衛門。八月朔日夜通し 御碇行二人

（測量日記では八月朔日は伊能隊は杵築泊と思われるが、一部日御崎にいたかも知れない）

一、同一貫二百文（大ノ）周兵衛、勘十。八月朔日夜通し 松江行二人、賃一人六百文づゝ、

（このとき、忠敬は足慣らしで、松江周辺を測っていた。忠敬への報告便か。徹夜でなくともいいと思うが）

一、同一貫文 惣助、兵藏。八月朔日夜通し秋鹿郡東長江村まで飛脚 二人賃銭一人へ五百文づゝ

（既に測量を終わった地域へ夜通しの飛脚を出している。数十キロある。忘れ物か）

一、同二百二十文（市ノ）徳右衛門。八月朔日夜通し、修理免、菱根、遙堪、入南、常松、栗津、堀江、里方、高岡、稲岡、栃島、武志まで

二人賃銭 翌日の測量のための人足呼び集めではないか。

夜明けとともに作業開始 場所に入足を集めるには、夜中に人足を起こし飯を食べさせなければならぬ。

夜中の時刻を、寝ていて知る方法は農民にはなかったろう。

一、同百八十文（大ノ）多十、竹三郎。八月朔日夜通し 人馬方より御用二付ひしね、ようかんまで二人

（右と同じか。人馬方の要求というから、荷物運搬用の人、馬の動員かも知れない。）

一、同二百文（市ノ）弥兵衛、利三郎。八月朔日夜通し こき舟の儀二付外其その飛脚二人





(こちらは船の集合命令の伝達か。)

一、同百文 (二ノ) 与八。八月朔申(見せ消し) 朝御本陣ニ脇さし腰帶わすれ置有之候ニ付跡より追かけ高岡まで参候飛脚一人 (脇差、腰帶の忘れ物を届ける)

一、同四十文 (二ノ) 徳次。八月二日中荒木行 一人

一、同三貫七百四十文 八月二日朝、焚天持二十二人乗船ニて杵築より宇龍まで参り候、相勤同日御跡戻りニ付、一諸ニ着候、一人ニ付百七十文づゝ

伊能隊は八月一日、日御崎から一部区域を残して杵築に移り宿泊。八月二日後戻りして測量がおこなわれたらしい。支援する焚天持二十二人を船で宇龍(日御崎より少し東側)まで送り、ここから作業を手伝って、終わったあと隊員と一緒に船で帰る。

大社の町は当時にもぎやかで、根拠地にしたかったのであらうか。舟で後戻りして測る例は時々でてる。ただ、具体的人足の運用、経費まで出てくる文書は少ない。八月朔日夜通しの船手配飛脚は、この配船手配ではなからうか。

一、同十貫三百四十文 八月二日宇龍より御跡戻りニ付、当所より平田まで同夜通し御越の節、人足四十七人入用賃銭 一人ニ付二百二十文宛

但内

御上三人様御駕人足十二人  
御家来駕人足 四人  
松林為九郎様駕人足 四人  
天文方様御荷物人足 六人  
御長持 人足 四人

御賄方御荷物人足 十人

御幕持 人足 二人

為九郎様腰箱人足 二人

焚天持三人

都合四十七人

八月二日に一番手坂部班と二番手高橋班は日御崎付近を測ったあと、平田にいつて宿泊している。(三番手下河辺班は宍道村にいつて泊まる。この移動が夜通しでおこなわれたことがわかる記述である。お上三人は各班長の高橋、坂部、下河辺の三人。お家来駕籠は内弟子の一名か(多分忠敬の息子の秀藏)。

松林は付き添いの藩士。天文方荷物と長持の人足十人がついて、賄い方の荷物運搬にも十人かかっている。

賄い方は膳碗から食材、三方、煙草盆、場合によつて夜具布団も持ち歩いた。高橋は自身の夜具を持ち歩いたことがわかつている。幕は天測場の設営などの幕か。松林の身の回り品入れの持ち人も必要だった。焚天持ちは本来ついて歩かなくてもいいが、親方三人だけ連れて歩いたのであろう。この数字は宍道村行きの分も含んでいる感じである。

一、同六百元 (市ノ) 伊蔵、次郎助。八月二日夜通し、宍道行二人

宍道村に向かう作業班があることを知らせる急使であらうか?

一、同百四十文 (市ノ) 徳蔵。八月二日今市へかけ付一人

一、同百二十文 (同) 林三。八月二日今市かけ付、此分為右衛門様方へ、天文方杵築より直々平田までへ御通り被成、何も相済候 拾文申来

候飛脚

与頭 為右衛門は今市居住で、与頭への使いか。時間をおいて、二度使いを出したのであろう。

一、同二百二十文(越ノ) 良助。八月二日夜通し、天文方御荷物才料賃銭

天文方荷物運搬の指揮者を別に付けたらしい。一、同百八十文 (市ノ) 徳右衛門。八月二日夜通し修理免より 御通り筋村々打廻り武志まで

松明触 飛脚一人

深夜の人足四七人を伴う平田、宍道への大移動に際し、沿道に松明を立てるよう、武志までの道筋に事前に触れを出した。

一、同一貫二百四十文 御本陣ニて 八月朔日より同二日まで 給仕人七人賃銭如此

但内六百元

利左衛門

儀三郎 一人二百づゝ  
文十

内六百四十文 四人一人ニ付 百六十文づゝ  
給仕人の手当二百文の者三人、一六〇文のもの四人だった。子供のことが書いてないが、親がひとりづつ付いたのかも知れない。

一、同八十文 (市ノ) 利左衛門、五郎右衛門。八月二日天文方御跡戻りニ付 俄ニ御本陣ニて給仕人二人やとひ候ニ付、一人へ四十文づゝ遣

ス 臨時の給仕人。

一、同百八十文 (かり) 藤右衛門。八月三日、武志行一人

一、同百二十文(中ノ) 嘉兵衛。八月三日、遙堪 矢尾行一人

一、同百五十文(かり) 藤右衛門 八月四日、あらき三ヶ村、浜大塚、小山、入南、遙堪八ヶ村打廻り飛脚一人



一、同百二十文（中ノ）嘉兵衛 八月四日武志行一人

測量終了後の連絡便か。

一、同一貫六百五十文 八月朔日宇龍より杵築まで、天文方御荷物人足十五人、賃錢一人二付百拾文づゝ 但此訳 宇龍浦人足払切二相成、杵築より被出候こぎ舟ノ水主の内、御差図七郎右衛門様より被成候

宇龍から杵築まで、測量の際、宇龍で人足が出せなくなつて、七郎右衛門様の指示で杵築から出た漕ぎ船の水主から人足を出しました。

一、同八百四十文 丁持二十一人分、八月二日、天文方宇龍より御跡戻りの節、御船上り場にて道はたか二付御具差上ケ、并二御荷物数々御本陣藤間やまで丁持、賃錢一人二付四十文づゝ遣し候

八月一日、宇龍から杵築まで船で後戻りのとき、荷物引き上げ、本陣へ運搬の人足賃

一、同百二十文（市ノ）惣右衛門。夜通し、八月二日平田へかけ付一人。

一、同百七十文（市ノ）三右衛門。八月二日夜通し、入南より武志まで村々打廻りかけ付、一人平田への夜通し移動の際の手配人足

一、同二百二十文（大ノ）喜次郎。八月二日夜通し、平田まで御案内の庄や中の、弁当雨具持人足一人

八月二日夜、平田まで御案内した庄屋衆の、弁当雨具持人足。

一、同四十二貫文 七月二十八日漕船十四艘水主一艘二付三人宛鷺浦より申参候分 二十八日鷺へ参夫より猪目へ乗廻し候。夫より浦々乗廻り

八月朔日、浮合悪敷八月二日二杵築え乗戻り、日数前儀四日分、一艘二付三貫文宛遣し候一日七百十文づゝ、人割二いたし一人分百八十七文づゝ遣し候

七月二十八日鷺浦よりきた三人乗の漕ぎ船十四艘を八月二日杵築まで使い回した費用。

一、同六貫文 漕ぎ船五艘 賃一艘二付一貫二百文づゝ

八月二日天文方当所より宇龍まで 御跡戻りの節漕船高十四艘御手配の内 外其浦より参杵築御手合 五艘分賃錢如此一艘二付一貫二百文づゝ 但 船一艘二水主五人乗 船前共二六人分一人二付二百文づゝ

八月二日に測量隊が杵築から宇龍へ戻る際に、漕船十四艘手配を求められ、他の浦からの船を別にして、当所から五艘出したが、一艘に一貫二百文づつで、六貫文かかった。一艘に水主五人、船頭一人で、一人二百文づつ六人分です。

一、同六百文 右の節こぎ船一艘の分 御碇より頭石まで参候所、不用の由二付乗戻り候二付半運賃遣し候

前記の際に、他に一艘、日御碇より頭石まで行ったとき、こまででよいといわれ戻ったので、半分の六百文支給しました。

一、同二貫四百文 右の節御手配の船十四艘雇置、翌三日朝乗廻し参候所 外其浦よりも参候二付杵築手配十四艘のうち六艘の分斗乗出し残り八艘の分不用の由二付養料として 一艘二付三百文づゝ遣し候 但一人え五十文づゝ遣し候由

右の船十四艘は杵築に手配を命じられていた三日朝に乗り回して来たのですが、他の浦からも船が出たので、六艘だけ使用され、八艘は不要となったが、手当を一艘三百文、一人五十文づつ渡しました。

一、同六百文（大ノ）茂兵衛、藤蔵。（中）善三郎、与右衛門、七蔵。ヱ

八月朔日夜天文方宇龍へ 御越二付俄二やかた船拵候節 雇人夫五人賃錢一人二付 百二十文づゝ

八月一日、天文方が宇龍へ 着いたとき、屋形船が必要とわかつて至急こしらえた際、人夫五人を賃錢一人百二十文づゝで雇った。

一、同三百文（大ノ）庄助頭取、七月二十九日雇人五人賃錢 御上り場ノ土俵拵させ賃、并二御着船の節ハはたか二てはいり候様手配申付不用二相成、何角心付として如此遣ス 一人へ六十文づゝ

船着き場の用意人足が不要となったので手当支給

一、同六百六十文 八月二日宇龍より御跡戻りの節、出夫二て八間二合不申二付、雇二いたし十一人分 賃錢此分万や并二大村や 月番所にて遣し候人夫 一人へ六十文づつ

賦役の人足が間に合わず、雇い人足を、万や、大村や、月番所から出した賃錢

以下まだ続くが、地元の方が測量日記と地図を対照しながら考えられたら、色々なことが分かると思う。



西十一月 文化十年 天文方御通行の節諸書付

伊能忠敬(天文方)文書目録 手銭家所蔵

頁番号	表 題	内 容	年 代	西 暦	備 考
一〇五	酉十一月日 杵築明細帳 大元也	寺院・神社・村の広さ他	文化十年十一月	1813	撮影画像は前欠
六〇一三	寅六月 杵築明細帳	寺院・神社・村の広さ・人口他	文化三年六月	1808	
一四〇二四	寅六月 六月天文方諸入用追仕出し月行司払控	人足代・飛脚代他	(文化三年)六月	1808	
二五〇三四	天文方并二御宮御見聞の節下宿賄仕出し帳 寅八月 杵築	宿泊費・草履・わらじ・人件費 他	(文化三年)八月	1808	
三五〇五七	文化三年寅八月 後 天文方衆御越の節諸飛脚雇人書出し并二漕船賃銭諸買物月番所入用共二書出し 杵築控	人足代・飛脚代・船賃・測量用品代金他	文化三年八月	1808	(四一)八月二日本陣に忘れた刀を飛脚が高岡まで届ける
五八〇七五	文化三年 市場村 後 天文方七月二十七日より八月三日まで御宮御見聞八月十四日より同二十日まで人足飛脚賃渡し帳 寅八月	人足代・飛脚代・測量用品代金 他	文化三年八月	1808	
七六〇七九	文化三年寅六月 六月天文方御越の節仕出し残り分書出し 杵築	人足代・飛脚代・測量用品代金 他	文化三年六月	1808	
八〇〇九五	文化三年寅六月二十四日 月行司さし紙控 天文方衆御越の節諸飛脚雇人夫勘定帳 外二冊諸調物并月番にて何角の帳面共二二冊有 杵築月番	人足代・飛脚代他	文化三年六月	1808	(八七)六月十六・十七日薬煎じる
九六〇一〇四	文化三年寅六月二十四日 月行司さし紙控 天文方衆御越の節買物并二番入用帳 外二冊諸飛脚雇人夫帳共二二冊ヲ以 杵築月番	人足代・飛脚代・測量用品代金 他	文化三年六月	1808	
一〇五〇二九	文化三年寅六月二十四日 此分郡つき合済 天文方御越の節諸飛脚其外雇人夫書出し帳 月番	人足代・飛脚代他	文化三年六月	1808	(一二五)六月十六・十七日薬煎じる
一三四〇一四四	手配の覚	天文方役人接待の心得	文化二年六月二九日	1805	文化二年 御用留 乙 丑正月吉日
一四五〇一四七	天文方隠州より帰帆御触書	隠岐から美保関經由で杵築測量予定の通知	文化三年七月二一日	1808	文化三年 御用留 丙 寅正月吉辰



## 伊能忠敬銚子測量記念碑建立詳報

宮内 敏

## 市民の伊能忠敬銚子測量認知度

伊能忠敬銚子測量の重要性は識者の間で指摘されているところであつたが、銚子市民の認識は高くなかつた。伊能忠敬を知らない人はいないのだが銚子測量が行われた事実はあまり知られていない。銚子市史などに僅かながら記載があるので郷土史などに関心のある方の間では勿論知られているのだが、その程度である。

伊能忠敬銚子測量の認知の低さの理由は忠敬の出身地香取市佐原が銚子と僅か三五kmしか離れていないことに起因すると思われる。奇異に思われるかもしれないが「伊能忠敬は佐原のこと佐原に任せておけばいい」という風潮があり、伊能忠敬について、ことさらに取り立てる必要が無いというのが一般的な市民感覚であつた。

富士山の方位測量の地、銚子市外川（犬若）で



犬若岬（伊能隊観測地）より富士山を望む



犬若の象徴犬岩に沈む太陽

数人に訊ねたが犬若岬で富士山測量が行われた事実を知る者はいなかった。

## 伊能忠敬の銚子認知度

かつて銚子と佐原は利根川の水運により関東有数の物流の拠点として共に栄えた。記録によると、忠敬は銚子を含む下総国周辺まで、主な家について縁戚関係を含め承知していたことが窺われる。それは幼少期を過ごした九十九里町・横芝町や佐原周辺は当然のこととして、商人忠敬として必須の事であつたのだろう。名主としてのネットワークの他、水運による商売上の繋がりもある。名主層の縁組は広範囲である。忠敬は銚子についてもかなり詳しく承知していたと考えられる。（千葉県史料近世編、文化史料 伊能忠敬書状22参照）

忠敬の文化二年八月三日の測量日記にも銚子の「知音（知人）へ伝言す」とある。

## 銚子測量に参加した平山宗平は

## 銚子の信太権右衛門家に婿入り

第一次、第二次伊能測量に参加した平山宗平は忠敬の仮親であり後見人であつた平山季忠（すえただ）の孫である。宗平は銚子測量に参加した後、旧荒野村（現銚子市）の名主信太権右衛門家に婿養子入りしている。婿入後も忠敬の孫、忠誨（ただのり）と密接な関係が続いた。忠誨日記にしばしば登場している。

（伊能忠敬研究会誌32号・39号参照）

この話を地元での講演で話した折、会場におられた信太さんから「①伊能忠敬が銚子に来た時、手伝いをした話。②見慣れない物があつたので伯

母が祖父に聞いたところ伊能忠敬が測量に使った道具であると聞かされた話。③人夫、小舟を用意した話」をされた。銚子と伊能測量隊との関係は深く、研究の余地はありそうだ。

## 碑建立の意義

伊能忠敬測量隊は一八〇一年八月二六日（旧暦享和元年）に飯沼村東町（現銚子市）田中吉之丞宅に到着し、富士山の方位測量のため九泊十日間滞在した。

①銚子は太平洋に突き出た東端の地で、富士山・筑波山・日光の山を目視できる。当時の測量方法に於いて銚子は必須の測量ポイントであつた。忠敬らは、これら山々の方位を測量することで測量の精度を確認し自信を深めた。銚子は測量記念碑建立にもっともふさわしい場所の一つである。

②伊能忠敬の銚子測量は登録された銚子ジオパーク（大地の公園）の貴重な文化遺産である。忠敬の測量志願理由の一つ「地球の大きさを知りたい」は将にジオで繋がっている。

③銚子は世界文化遺産に登録された富士山の可視最東端の地である。（現在の最東端は銚子ポートタワー、建物以外では銚子市長崎海岸）

④伊能忠敬の時代、銚子と佐原は水運で共に栄えた佳き時代であつた。香取市（佐原）・銚子市の協調で観光面から当時の絆を再現できないか。

⑤香取市が中心となり「伊能忠敬」を大河ドラマにすべく推進協議会が積極的に活動している。時宜を得ていると思われる。

⑥銚子測量記念碑は学習の場として、観光資源として地域の活性化に大いに役立つものである。銚子の新しい観光名所となることが期待される。



前述の市民感覚では記念碑を建てることは難しい。先ずは伊能忠敬の市民レベルでの認知度を上げる事が重要であつた。

②伊能忠敬関連の講演会を鋭意計画し実行

③国木田独歩記念碑が建つことを知り除幕式や祝賀会に参加し建立に至る経緯を学ぶ。

銚子市には銚子賞という制度がある。採用され  
ると事業に補助金がでる。それを利用して「石柱  
一本でも建てたい」との思いが出発点になった。

その頃、千葉科学大学主導による「銚子ジオパーク登録を目指す市民の会」の話を目にした。

地質分野は全くの門外漢であったが記念碑との関連を求めて千葉科学大学の講座に参加した。

銚子ジオパーク市民の会の会長は市議で元同僚の工藤忠男氏であった。主旨を話して伊能忠敬研究会に入会して頂いた。その後、地元外川でミニ資料館の館長さんをされている島田泰枝さんにも入会して頂いた。銚子での研究会のメンバーは草創期からの石嶋さんと私を含め四名になった。

工藤氏に窓口になつて頂き、銚子市観光商工課、生涯学習課等の担当者に伊能忠敬銚子測量碑建立の意義を説明し、銚子の活性化に役立つ事業であることを説明する機会を得た。

その頃であつたと思うのだが、伊能忠敬研究会の理事会の流れの会で「銚子の記念碑」が話題になった。その折、渡辺名誉代表と高安理事から「銚

早速、工藤氏と共に市長面談の機会を市にお願いし実現した。その後、市の事業として実現しそうな雰囲気があったのだが、結局その話はリセットされ再スタートとすることになった。

市の関係部署も伊能測量記念碑建立に理解を示してくれて実現可能な方法を一緒に模索した。

①銚子賞に応募、②文科省の補助事業に応募、③市制施行80周年記念事業の市民提案に応募、等である。

最終的に市制施行80周年記念事業の市民提案事業に応募することになった。応募用紙に「実行委員会を立ち上げ予定」と明記した。

市民提案事業に選ばれるためには市民の伊能忠敬に対する認知度をさらに上げる必要があった。そのため機会あるごとに講演会、地元新聞への連載（伊能忠敬講座一五回）などの活動を行った。

実行委員会委員長に当時銚子商工会議所会頭であつた伊藤浩一氏にお願いし快諾を得た。直ちに、伊藤氏を中心に組織づくりに入つた。実行委員会の各メンバーは忙しい方ばかりであつたが協力して活動できた。このような事業では、皆でやるこゝとが一番大切である。

依頼文と共に配布したカラーの完成予想の絵図は募金活動に大きく寄与した。また、委員長が商工会議所会頭であったこともあり企業は話を聞いて

各実行委  
員の個人的  
人脈もあつ  
て募金活動  
は順調に推  
移した。

[illegible]





屏風ヶ浦の断崖  
(東洋のドーバーと呼ばれる景観)

ク」のジオサイトの一角でもある。運が良ければ伊能忠敬銚子測量の象徴「富士山」を目視できる。建立された「伊能忠敬銚子測量記念碑」は銚子ジオパークの大切な文化遺産になった。

(注) 屏風ヶ浦ジオサイト

屏風ヶ浦は銚子市名洗町から旭市刑部岬まで続く長さ一〇km、高さ五〇mもある海食崖で地層むき出しの景観は「東洋のドーバー」といわれる。断崖の地層は犬吠層群とよばれ三〇〇〜四〇万年前海底で堆積し、その上に一二・五万年前までに香取層等が、一二万年前以降には関東ローム層が堆積した。地層は西方向に緩く傾き、引つ張りによる正断層が見られ、浸食に弱い崖となつていく。露頭には火山灰層の白い地層が多くみられる。二五〇万年前の丹沢が給源の広域火山灰層(丹沢・ざくろ石軽石層)の下に、人類の時代の第四紀とそれより前の新第三紀鮮新世の境界(二五八・八万年前)を見ることが出来る場所でもある。

#### 設置場所に相応しい碑の検討

碑は周囲の景観に調和

することが求められた。

①自然石を用い碑の高さも一五〇〇mm以下とする。

②碑は堂々として存在感があるもの。

③碑文・絵図は陶板とし情報量を多くする。

碑文は二〇〇字以下に抑え絵図部分を大きくする。

④富士山の方位を示す指示盤を設置する。

#### 碑の前の方位盤



碑のある風景、右はジオサイト案内板



いよいよ着工

#### 記念碑概要

##### 設置場所

銚子市潮見町地先

##### 建立日

平成二五年十一月十七日

##### 設置主体

伊能忠敬銚子測量

記念碑建立実行委員会

##### 基礎部

二五〇〇×二五〇〇

×四〇〇mm 碑本体と同材の縁どり。

##### 碑本体

高さ一三〇〇mm、幅一七〇〇mm、奥行き一〇〇〇mm、重さ(加工前で六ト)茨城県産の「稲田のさび石」と呼ばれる白御影の自然石を使用。

縁どりされた基礎の中央に碑本体が設置され、碑と共材の玉砂利が敷きつめられている。

碑中央部分には碑文と伊能大図銚子半島部分に加筆された地図が厚さ一〇mmの陶板に焼き付けられ嵌められている。

碑文は三〇〇×六〇〇mm、地図は五〇〇×六〇〇mmの大きさがあ

る。左手前に富士山を示す方位盤が設置されてい

る。

町内会長を回って理解と協力をお願いした。

活用される記念碑を目指して

愛され地域に役立つ碑になるには、多くの市民、とりわけ地元の人に認知されることが絶対条件である。①除幕式では地元小学生に引き手役をお願いしたのも名案だった。(提案…香取市・本郷氏)

②記念碑近くに銚子ジオパークの案内板がある。ジオとの相乗効果が期待できる。③地元高神地区の寺及び銚子連合町内会長、地元犬若、名洗の各町内会長を回って理解と協力をお願いした。



記念碑全景



雲一つない好天に恵まれた除幕式



# 伊能忠敬 鉾子測量記念碑

(富士山可視最東端の地)

伊能忠敬測量隊は享和元年(一八〇一)七月十八日から九日間鉾子に滞在しました。鉾子は太平洋に突き出た東端の地で富士山・筑波山・日光の山々を目視できます。特に富士山の方位測定は、測量の正確さを確かめるために重要でした。忠敬は七月二十六日の測量日記に「晴天、此早朝日出に犬若岬に於て(中略)富士山を測り得たり其の悦知るへし(下略)」と記しています。忠敬は此地で測量の精度を確認し自信を深めました。



平成二十五年十一月  
鉾子市制施行八〇周年記念事業実行委員会  
伊能忠敬鉾子測量記念碑建立実行委員会  
伊能忠敬研究会

←石彫→ <-----地図及び碑文は陶板-----> ←石彫→



記念碑位置から富士山を望む



除幕式、講演会等の記念行事他、記念碑建立関連の報道は地元誌「大衆日報」、「鉾子よみうり」、「鉾子テレビ」、「千葉日報」他、全国紙の読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞でも報道された。



## 伊能探訪のすすめ

## ―五島列島の旅―

河崎倫代

昨年より、「ついでに」・「ちょこっと」伊能探訪をお勧めしてきたのに、今回は五島列島となると、金沢からは「ちょこっと」といえない距離にあった。しかし、娘の五島列島カトリック教会群の外壁（煉瓦・漆喰・石材）調査に同行して、曾祖父が灯台看守をしていた古志岐島へ行く、その「ついでに」坂部貞兵衛終焉の地を訪ねてみようという旅を企画した。

## 一、福江島（長崎県五島市）

福江島には、伊能忠敬の片腕として第五次（八次測量の八年間）を支えてきた坂部貞兵衛の墓があり、世田谷伊能家から坂部書状十通が寄贈されたことで、会報にも何度か紹介されている。

## (1) 会報の既報記事

新会員の参考にと、目に留まった既報記事を挙げておく。抜け落ちたものもあるかと思う。

・第八号（一九九六年）〜十一号（一九九七年）

安藤由紀子「坂部貞兵衛の書状・人物紹介」

・第十四号（一九九八年）

的野圭志「伊能忠敬測量日記に見る五島の

歴史と風土」

・第二十四号（二〇〇〇年）

伊能陽子「坂部さんの手紙」

・第四十三号（二〇〇六年）

石川清一「坂部貞兵衛と遣唐使遺跡」

・第四十五号（二〇〇六年）

伊能陽子「坂部貞兵衛の新案内板が完成」

## (2) 坂部貞兵衛の書状

長崎から高速船ジェットフォイル「ペガサス」で一時間半、福江港に到着した。レンタカーで堂崎教会と楠原教会を訪ねた後、福江城跡にある五島観光歴史資料館を訪れた。目的は、二〇〇〇年に世田谷伊能家から寄贈された坂部貞兵衛書状の閲覧だった。

二〇〇五年十月に九州支部が研究旅行で訪れた際は（会報四三号）一通ずつ封筒に入っていたというが、現在は写真のような白紙の上に一通ずつ広げられた状態で重ねられて、横長の箱に十通すべてが納められていた。閲覧の度に封筒から出し入れする必要もなく、折り目も付かないので、書状にとって優しい状態で保管されているといえよう。もしこれらの書状が伊能忠敬記念館に寄贈されていたならば、今頃は「国宝」だったはずのものである。福江島に寄贈された意義を五島市民に周知していただき、小・中学生の郷土学習や一般市民の生涯学習に、観光客へのアピールにと、有効活用されんことを祈った。当方の不手際から、当日朝の電話による突然の閲覧願ひにも関わらず、閲覧・撮影を許可していただき、大変感謝している。



五島観光歴史資料館（福江城跡内）

文化10年(1813)6月26日付  
坂部最後の書状

## (3) 坂部貞兵衛の墓

墓所のある浄土宗芳春山宗念寺へ電話して来訪希望を告げたが、先代住職が亡くなった後、島外から入った現住職は何も分からないからお相手はできないが、墓参はどうぞご自由に、とのことだった。本堂に向かって左手に案内板があった。



案内板



坂部貞兵衛の墓



坂部の墓は本堂裏手にあった。文化十年（一八一三）七月十四日の「測量日記」には、「我等昨十三日玉之浦にて坂部病氣不宜なりと聞。今朝当所出立。陸行。九時半頃福江へ着。大病に相成に付、江戸御役所へ書状を出す」。十五日の項には「我等は福江逗留。今泉隊も同。此日八時半頃、坂部貞兵衛病氣養生不相叶、於福江町命終。早速、測量両手へ申遣し、猶又、江戸表御役所へ死去届書状を出す」とある。

葬儀は翌十六日に行われた。墓は五島藩家臣貴方家の墓所内に建立され、長くお世話していただいてきたが、現在、貞方家は自家の墓所をたんで島外へ転出されたという。想像していたより大きな墓だったが、写真のような現状で、同行した娘の見立てによると、少なくとも八種類以上の地衣類に覆われているという。

伊能忠敬と隊員たちは葬儀後も数日逗留して、坂部の所持金や所持品・書籍類を改めたことが「測量日記」に記されているが、墓石の手配は誰がしたのだろうか。今回、石材についても尋ねたかったが、つてがなく不明のままとなっている。

#### （４）「伊能忠敬 天測之地」碑と案内板

福江港に近い東公園（栄町）の一角に「伊能忠敬 天測之碑」と刻んだ石碑と案内板が並んで建っている。案内板には「福江出身の東京理科大学名誉教授今道周一氏のご協力により設立したものである」と記されている。

東京理科大学ホームページでは「今道周一氏は、一九二一年物理学校卒業の理学博士。中央気象台に勤務中ドイツ留学し、地球電磁気学研究に従事。二九年には、日本初の地磁気観測所の所長に就任。五四年に本学教授となり、後に理学部長に就任。

その間、教科書『概説物理学実験』の編集に携わり、第十二版まで刊行」と簡略に紹介されている。



#### 二、中通島（長崎県南松浦郡新上五島町）

『伊能図大全』で五島列島を見る。伊能忠敬測量隊は、なぜこんなにも小さな、しかも無人の島まで測量したのか。今回の五島の旅で実感した最大の謎である。

五島には、本土での弾圧を逃れて移住してきた隠れキリシタンがいた。それとなくそんな村々を探るといふ目的（公的か私的かは不明だが）もあったのかと、初めは軽く考えたりしていた。しかし、五島列島最東端、頭ヶ島の歴史を知ると、疑問は深まった。

現在の頭ヶ島は、ユネスコの世界文化遺産暫定リストに掲載された「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を構成する頭ヶ島教会（国指定重要文化財）があることで注目されている。測量隊支隊はこの島とすぐ近くの轆轤（ろくろ）島を測っている。

訪れた日はたまたま長崎県知事選の投票日で、教会から共同墓地へつづく道の途中に投票所が設

けられていた。目の前に轆轤島が見えた。「測量日記」には「轆轤島一周。十七町三十八間一尺」とある。周囲わずか二キロ弱の無人島である。実は、測量隊が訪れた時は頭ヶ島も無人島だった。その後中通島の鯛之浦から迫害を逃れた隠れキリシタンたちが移住してきたが、明治六年（一八七三）にキリスト教禁止令が解かれるまで苦難の歴史が続いたという。

幾多の困難を乗り越え、頭ヶ島の石を使った総石造りの教会が完成したのは大正六年（一九一七）のことだった。たまたま利用したタクシー運転手と会話がはずみ、測量隊が宿泊した天測も行った友住（「測量日記」では友栖（すみ）村）の人だと知った。頭ヶ島、友住付近は「上五島石」という砂岩の産地で、海岸で切り出して船で運ばれた石材が、長崎市街のオランダ坂石畳やグラバー邸などで使用されたのだという。

五島の島々は陸地が沈降したりアス式海岸のため、砂浜や平地が少なく断崖絶壁の海岸が続いている。そこでの測量は、坂部のように体力を消耗し、時として死に至る過酷な作業だった。なぜ小さな無人島まで測量する必要があったのか、筆者の単純な頭では疑問は解けない。どなたか教えを乞う！



五島石を積み上げた頭ヶ島教会  
（国指定重要文化財）



頭ヶ島の共同墓地。  
ここから轆轤島が見える



## 三、宇久島（長崎県佐世保市宇久町）

中通島の有川港を早朝に出航した佐世保行き高速船は一時間で宇久平港に着いた。事前にお願いであったので、宇久島観光協会のボランティアガイド大岩さんと山田さんが来て下さった。大岩さんは元中学校の先生で島のことは何でも知っている名物ガイド。事前に伊能忠敬のことも話してあったので、佐久間達夫氏校訂の『伊能忠敬測量日記』（大空社）から宇久島部分を抜き出して準備して下さっていた。

## （1）忠敬が出会った医師西川行庵

老岐・対馬を終えた測量隊は、文化十年（一八一三）五月二三日、五島列島北端の宇久島に渡り、ここから南下して、七十日間かけて五島列島全域を測量した。宇久島には三泊している。初日、挨拶に出た十四名の中に医師西川行庵がいた。「測量日記」には「此医、大坂出生にて、江戸長崎経歴。諸名家を知し人なり」とある。測量隊の中に誰か病人でもいたのか、単なる挨拶だったのか。三日目には「佐助病氣」とあるから、忠敬は西川行庵とあれこれ話をしたに違いない。その人の墓を先日見つけたという大岩先生の案内で、一宝山東光寺を訪れた。五島の歴史は五島市観光協会ホームページの「五島史年表」に詳しいが、初代は平家盛。源平の合戦後、宇久島に逃れて領主となり宇久姓を名乗る。八代目からは福江島に移り五島全域を平定した。後に五島姓に改め福江藩主として明治を迎えた。その初代から七代までの菩提寺が大光寺である。

墓地の正面奥が宇久氏七代の墓所で、向かって左側の前列奥に西川行庵の墓があり、忠敬が日記に記したように、「大阪の人。中井履軒に学び、江

戸へ出て桂川氏に医学を学び、長崎で医を業としていた」経歴が刻まれている。



「完全復元伊能図全国巡回フロア展  
in 金沢工業大学」（2010年10月）にて



## （2）神浦湊で天文測量

伊能大図には平村と神浦村に天測場所を示す☆印がある。今回、神浦村での天測場所がほぼ特定できた。ガイドをして下さった山田さんの出身地であり婚家先でもあったから、一軒一軒の屋号までご存じだった。左上の写真は、現在は保育園になっているが、江戸時代の代官屋敷跡である。写真奥に忠敬が宿泊した本陣泊四郎左衛門の子孫宅が見える。天然の良港なので空き地は少ない。代官所跡は数メートルの高さに石垣を組んで敷地

を造成したようだ。

そこから撮った下の写真が神浦港である。伊能図にも湊印がある。右へカーブする道路の左側の三角屋根の家が肥前屋だと山田さんが教えてくれた。「測量日記」に記された内弟子の宿所だ。今回もまったく予期せぬ出会いから、充実した伊能探訪となった。



## （3）伊能隊、古志岐三礁は遠測

宇久島最北端の対馬瀬（対馬が見える）の東の海上に古志岐三礁と呼ばれる小島（岩礁）がある。地元では、本島・沖の瀬・ヘタの瀬と呼んでいるが、伊能大図には大・中・小の各古志岐島が明記されている。また、「測量日記」には「小敷瀬大中小三瀬。大、周三町余。中、周二町余。小、周一町余。何れも壁立也。大難所、遠測。」とある。実際に渡島していないので測線はない。

周囲わずか三百メートル余りの大古志岐島に灯台が初点灯したのは明治二十七年（一八九四）九月十三日のことである。日清戦争直前の同年五月に、海軍省から逓信省航路標識管理所に対し、急造（一週間以内に竣工）を要請された五灯台の一つが古志岐島灯台だった。軍港佐世保から黄海に進



航する艦船の軍事輸送上、最重要視された突貫工事だ。さすがに一週間以内は無理だったが、昼夜努力して、八月末から九月初めにかけて次々に点灯させたという。幕末、開国日本への進出をもくろむ欧米列強の外圧から始まった洋式灯台建設は、明治日本のアジア進出のための水先案内人へとその役割を変えていった。



「完全復元伊能図全国巡回フロア展  
in 金沢工業大学」(2010年10月)にて

#### (4) 我ら、古志岐島へ上陸敢行！

筆者の曾祖父が古志岐島灯台で勤務したのは、大正十一年(一九二二)八月からの四年間である。その勤務地を見たくて、宇久行政センターを通じて、釣り人を運ぶ瀬渡し船「えびす丸」を紹介していただいた。天候の動きからすると、すぐにも出航した方が上陸の可能性が高いという松本船長の判断で、大岩先生、山田さんと共に乗り込んだ。およそ十分で島の正面に着いたが、波風が立っていて不慣れな者は危険だとのこと、横手に回って上陸を試みた。人生で初めての経験。なかなか飛び移る勇気が出ない。松本船長に「どうしま

すか？」と問われた。ここまで来たからは、「行きます」と答えてしまった。上陸後は切り立った絶壁にほぼ垂直に架けられた鉄梯子を登る。その時心底「怖い」と思った。望んでやってきた自分は何かあっても仕方がないが、無関係の人たちにはどう責任を取れるのか。その思いがわき起こっての「怖い」だった。

周囲三百メートル余、高さ五十一メートルの岩礁の頂上は狭く、灯台と古志岐神社の間の十畳くらいの平地にかつての官舎跡が見られた。おそらく灯台設置時にはここに小さいがかなり堅固な建物が建っていたのだろう。三名ずつ十日間勤務体制だったという。台風襲来や冬の時化にもじっと耐えるしかなかっただろう。宇久島の退息所(今は荒地)が見える。そこには妻と小学生の娘がいる。二人もいつも灯台を気に掛けながら日々を送っていただろう。

こんな職場だったのか、と涙が出そうになった。しかし、登りも下りも怖くて怖くて(足を踏み外せば真つ逆さま、突風が吹けば真つ逆さま)、涙で見えなくなれば大変と泣きたい気持ちを押し込めて、ようやく「えびす丸」に生還した。



灯台の石段から見た  
旧官舎跡地と古志岐神社



宇久島の反対側から見た古志岐島

#### あとがき

五島はおよそ一四〇の島々からなっているという。その中の幾つの島を測量したのだろうか。

御用旗を先頭に伊能忠敬たちがやってきた時、隠れキリシタンの人たちはさぞや驚き恐れたことだろう。今は立派な教会堂が五十あるという。明治六年に禁教令が解除されて、晴れて信仰の自由を得た信者たちによって建てられた。

背負い梯子に沢山の煉瓦をくくり付けて建設現場へ向かう女性たちの写真があった。強制された労働ではない、生活費を稼ぐための労働でもない、信仰心から出た無償の奉仕の姿だった。

遠いと思っていたが、行くと決めたなら、あとは楽しい出会いと「ハラハラ万丈」の旅だった。宇久島の大岩さん・山田さん・松本さん・福井さん、大変お世話になり、ありがとうございました。

最後に、得々情報と注意情報とお詫びを。

☆長崎県内の島、老岐・対馬・五島でのみ使える「しまとく通貨」は本当にお得です。

★天気予報は、晴曇雨情報より風の強さ・波の高さに注意して。高速船・フェリーの乗船券予約時の連絡先は携帯番号を。現地で欠航連絡が入ります。

★「伊能探訪」＋「ご先祖探訪」になりました。

#### 参考文献

- ・『伊能忠敬の足跡』伊能忠敬銅像建立実行委員会 (平成十四年)
- ・『日本燈台史』海上保安庁燈台部編  
社団法人燈光会 (一九六九年)



## 伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

## ―各地の記念碑・標柱等紹介(一)―

昨秋より、全国の市町村(『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。北海道から日本海に沿って南下していますが、鉄鎖など使用せず日々ひたすら歩測で進めても時間が足りない状況です。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、今号から会報で随時紹介することになりました。もし、旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、伊能忠敬測量隊の足跡に思いを馳せるとともに、それを顕彰し郷土の歴史として学びの中に取り入れている地元の方々、小・中学生の皆さんの存在にも思いを寄せていただければ、このシリーズ担当者としては嬉しい限りです。

## 一、北海道野付郡別海町

昨年十一月、千葉県銚子市に「伊能忠敬銚子測量記念碑」が建立され、除幕式が盛大に挙行されたことは記憶に新しいところです。銚子は「富士山可視東端の地」ですが、ここ別海町は「伊能忠敬測量隊到達最東端」の地として、記念柱が建立されました(詳細は会報三七号一〇〇四年)。今回の調査依頼に際して、当時「記念碑建設期成会」事務局長を務められた川村俊也氏より多量の写真を取めたDVDを送っていただきました。新入会員も多くなっています。「建立↓倒壊↓再建」とい

う道をたどった記念碑として、今後の保存活動の参考にもなると思います、いただいたカラー写真でその経過をたどってみます。

## (1) 伊能忠敬隊の歩いた道

海岸、湿地、灌木の中、道なき道にも可憐なハマナスの花が咲き、隊員の心を和ませてくれたことでしょう。「これらの風景は伊能忠敬一行が歩いた当時とほとんど変わっていません。これは伊能が歩いた日本全国の中でも当地だけのことと考えています。」(川村俊也氏)



## (2) 二〇〇四年七月、記念柱除幕式

①名称 「第一次伊能忠敬測量隊到達最東端記念柱」

②碑文 「伊能忠敬再発見 伊能忠敬研究会創立十周年記念 寛政十二年(一八〇〇)閏四月五歳の伊能忠敬は若者五人と共に江戸深川を出発し一〇七日かけて一六一二キロを歩測しこの地まで到達天体観測をおこないました。二〇〇四年七月十五日 伊能忠敬研究会 別海町伊能忠敬記念碑建設期成会 建立 大関香勝 書」

③設置場所 野付郡別海町本別海三、五  
④設置年月日 二〇〇四年七月十五日  
⑤設置団体 伊能忠敬研究会・別海町伊能忠敬記念碑建設期成会  
⑥設置の経緯 北海道別海町西別川河口一本松

付近は伊能忠敬の記念すべき第一次測量の最終到達地であると同時に到達最東端(最北端)の地である。歴史に残るこの業績を永く後世に伝えるために、釧路市で開催される「アメリカ伊能大図里帰りフロア展」開催を機会に別海町観光協会・伊能忠敬研究会の協力をいただき、記念柱を建立した。

⑦見学の可否 随時可能。



※盛大な除幕式が行われ、当会からも多数が参加した。伊能陽子さんの姿も見える。



(3) 初代記念柱、倒壊から再建へ  
その後、初代記念柱は根元が腐食し、二〇一一年十月に風雨で倒壊しました。しかし、翌年六月、ニシベツ伊能忠敬研究会の尽力で建て替え工事が行われ、立派に再建されました。



(ニシベツ伊能忠敬研究会・別海町生涯学習課提供)

**北海道新聞**

2012年(平成24年)6月26日(火曜日)

**伊能忠敬の記念柱再建**

別海の研究会 頑丈な作り

【別海】ニシベツ伊能忠敬研究会(磯田忠雄会長)は23日、町内本別海の「第一伊能忠敬測量隊東遼到達記念柱」を建て替えた。2004年7月に建立した初代の柱は腐食して倒壊し、昨年10月に倒れていた。

伊能忠敬は、1800年(寛政12年)の開港の際、江戸から北海道まで歩き、当時のニシベツ(現在の本別海の西別河口付近)で引き返している。本来

**根室 NEMURO**

伝え続けたい郷土の歴史

上下にステンレスのカバーを取り付け、後ろに支えも設け、頑丈な作りにした。

磯田会長は「本格的な観光シーズンに前に再建できて良かった。今後、観光コースに取り入れたい、学校の教材として活用してもらえたら」と話している。(本誌取材)

新しい記念柱と磯田会長(右端)ら会員たち

二、北海道松前郡福島町

①名称 標柱「伊能忠敬蝦夷地上陸の地」

②設置場所 松前郡福島町字吉岡漁港内

③設置年月日 平成十一年四月十一日

④設置者 福島町教育委員会

⑤設置の経緯 伊能ウオーク記念

⑥見学の可否 随時可能

(北海道新聞提供)



(福島町教育委員会生涯学習課提供)

- 三、青森県東津軽郡外ヶ浜町
- ①名称 標柱「伊能忠敬蝦夷地測量向いし此之地」
- ②設置場所 東津軽郡外ヶ浜町字三厩新町
- ③設置年月日 不明
- ④設置者 発起人・野崎信行(当会会員)
- ⑤設置の経緯 不明
- ⑥見学の可否 随時可能



(外ヶ浜町教育委員会社会教育課提供)

現在、雪で埋もれていて再撮影は不可能とのこと



#### 四、青森県青森市

- ①名称 ゆかりの地表示「伊能忠敬」
- ②説明文(概略) 寛政十二年(一八〇〇)、その重要性が注目されてきた蝦夷地(現 北海道)沿岸測量の大任を受けた伊能忠敬が、蝦夷地への下向の途中、大町(現 青森市本町五丁目)西沢善兵衛宅に止宿した。
- ③設置場所 青森市本町五丁目六・二シャトゥーム本町前(西沢家跡地)
- ④設置年月日 平成七年八月二二日
- ⑤設置者 青森市
- ⑥設置の経緯 青森市ふるさと再発見事業計画に基づき、街の歴史を掘り起こし、史跡表示などの整備を進めていく中で、由緒ある旧町名や街にゆかりのある人物等を表示しようという市民の機運の高まりから「青森市旧町名・ゆかりの地表示事業」がはじまり、その中で設置されたものである。
- ⑦見学の可否 随時可能。



(青森市 市長公室広報広聴課提供)



#### 五、秋田県大館市

- ①名称 「矢立峠 伊能忠敬測量隊記念標柱」
- ②設置場所 大館市長走 矢立峠遊歩道
- ③設置年月日 平成十一年五月十八日
- ④設置団体 北羽歴史研究会
- ⑤設置の背景 郷土史教育
- ⑥見学の可否 随時可能



(大館市教育委員会文化財保護係提供)

#### 六、群馬県安中市

- ①名称 群馬県指定史跡「小野良佐栄重の墓」
- ②説明板あり
- ③設置場所 安中市板鼻一九一五 南窓寺
- ④設置年月日 昭和二六年四月二四日
- ⑤設置者 南窓寺
- ⑥設置の背景 指定文化財のため、標柱と説明版は、安中市教育委員会が設置
- ⑦見学の可否 随時可能

※上野国板鼻宿の人。数学に関する著書があり、その序文に日官測量属士とあるので、暦局に勤務していたのではないかとされる。第四次測量に参加したが、三国峠を越え江戸へ向かう途中、病気のため、高崎で測量隊と別れて故郷の板鼻へ帰った。『伊能忠敬測量日記』では「小野良助」と記されている。「伊能忠敬研究」二十号(一九九九年)に伊藤栄子さんが「小野良助と和算について」書いている。



(安中市学習の森文化財係提供)

あとがき

今回紹介した中で、北海道福島町の木製標柱の「材料費・設置費0円」という回答には、考えさせられました。たった一本の標柱が、「伊能忠敬が来た」ことを生徒たちにも市民にも語ってくれます。誰でもどこでもできそうなヒントをいただき、一会員として参考になりました。

(没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代)



山武歳時記(五)

―江戸庶民の信仰を集めた房総の大寺―

「芝山仁王尊観音寺」

江口俊子

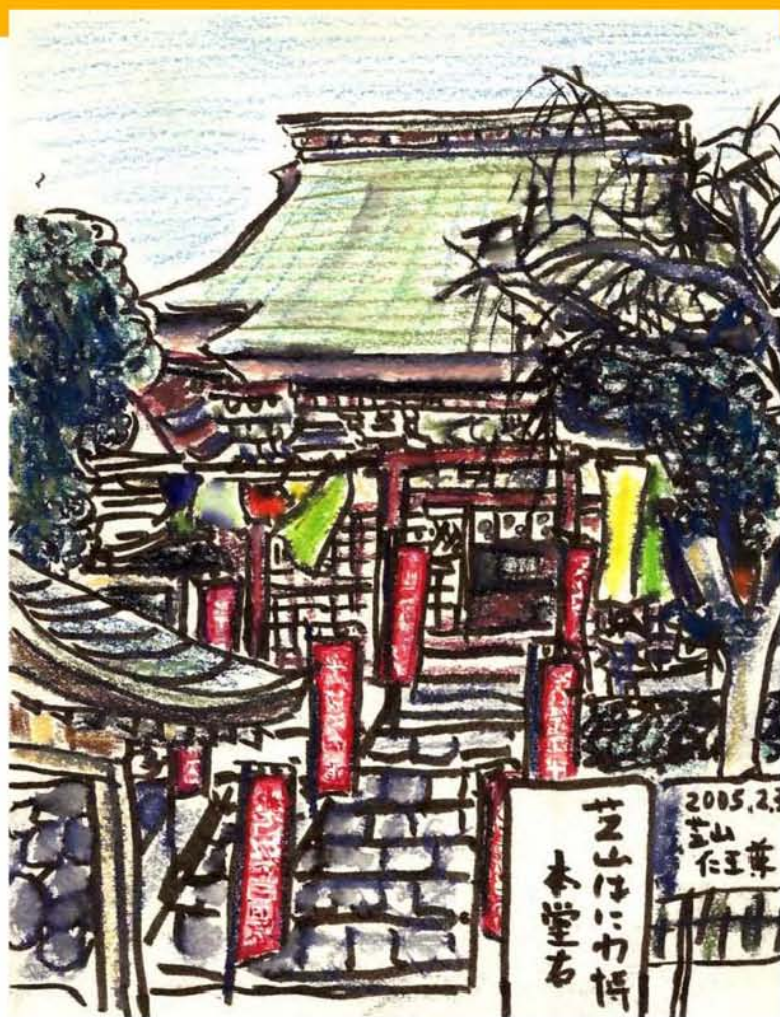
江戸時代後期、火事、泥棒除けの信仰を集め、「江戸の商家で芝山の仁王様の御真影を貼らないお店は無い」とまで云われたのが、芝山仁王尊観音教寺です。

この寺は天台宗に属し、奈良時代末期の天応元年(七八一年)光仁天皇の勅令を受けて、征東大使藤原経縄が創建したと伝えられる名刹です。本尊には十一面観音(平安時代末期)秘仏をお祀りしてあります。



(上) 江戸時代から今に伝えられる火災、盗難、災難除けのお仁王様のお札。

さて私が山武市に引っ越してから、初詣、節分に一番多く、お参りしていますのが、芝山仁王尊です。お寺は千葉県山武郡芝山町にあります。



(上) 本堂(観音堂)。ご本尊は十一面観音像(秘仏)。

(右下) 節分会。(三重塔前の特設舞台で豆まき。)

豆(落花生)、スナック菓子。おもちゃ。ポーチなど、かなり大振りのものが飛んでいた。 ↓



芝山仁王尊をご案内いたしましょう。まず、参道から見上げると、屋根坪で二百坪を超える壮大な仁王門を目にします。

一般に仁王門をくぐる時に仁王様を拝めるのですが、ここでは、門の左右の堂内に畳が敷かれ、奥に須弥壇が設けられ、その上に仁王尊天がお祀りされています。

仁王尊天は高さ一八〇センチメートル、嘉慶二年(一三八八)に造立されました。

仁王門をくぐり、階段を上がりますと境内です。





(上) 芝山公園古墳広場の武人(渡来人の姿をしたはにわ)

左側には文政九年(一八三八年)に完成した観音  
教寺三重塔があります。この塔は成田山新勝寺  
三重塔と並んで、江戸時代の好みを反映していま  
す。  
正面には本堂(観音堂)、隣接して芝山はにわ博  
物館があります。  
ここ芝山に五〜六世紀、豪族が現れ、墳墓が芝  
山古墳群として、今に残っています。  
博物館には、殿塚、姫塚で発掘されたはにわが  
展示され、中でも武具を着けた渡来人の姿を写し  
たはにわ、大型でとてもユニークです。  
芝山仁王尊は椿の寺としても有名で、境内には  
多くの椿があり、葉が金魚の尾ひれのような金魚  
椿は仁王門の脇に。  
昭和わびすけは三重塔の側に。大きな白いやぶ椿  
など、私は毎年楽しみにしています。

(下) 芝山さくら祭り。

(芝山公園のお祭り広場で、四月  
に行われる。右手は露店で賑わっ  
ていた。) ↓



平成二十五年二月三日(節分)、芝山仁王尊に参  
拝しました。まず本堂で、年一回、節分会でしか  
拝観する事の出来ない、御前立本尊十一面観音(鎌

倉時代前期)を拝み、豆まき見て、厄払いをした  
気分、参道を後にしました。



## 資料

## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第九回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第六次測量】(四国沿岸・大和路の一) 自 文化五年一月二五日 至 文化五年五月十日

【表中赤字文字は改訂増補部分】

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化五年一月 (1808)						
二五	中食 (2, 21)	品川宿	東京都品川区	湊屋弥三郎	八幡宮に参詣し出立す。	九十三
		神奈川宿	神奈川県横浜市 神奈川区	大塚屋留右衛門		九十三
二六	中食 (22)	戸塚宿	同 横浜市戸塚区	葉府屋与五右衛門		九十三
		藤沢宿	同 藤沢市	吉田屋仁兵衛		九十三
二七	中食 (23)	大磯宿	同 大磯町	本陣小嶋才三郎		九十九
		小田原城下	同 小田原市	本陣清水彦十郎		九十九
二八	中食 (24)	箱根宿	同 箱根町	本陣 白井屋三郎右衛門		百一
		三嶋宿	静岡県三島市	本陣世古六太夫		百一
	中食 (25)	原宿	同 沼津市	本陣高田平左衛門		百一
二九		吉原宿	同 富士市	四目屋平左衛門	この所にて浜松城下より気賀街道を御油宿迄測量の先触を出す。此夜より忠敬持病の痰発	百一
文化五年二月 (1808)						
一	中食 (2, 26)	由比宿	静岡県静岡市清水区	羽根野屋伴右衛門	忠敬持病痰にて病氣	百七
		江尻宿	同 静岡市清水区	府中屋茂平衛		百七
二	中食 (27)	丸子宿	同 静岡市駿河区	米屋市郎右衛門	忠敬病氣	百七
		藤枝宿	同 藤枝市	本陣青島治右衛門	忠敬病氣	百七
三	中食 (28)	日坂宿	同 掛川市	鳥井権右衛門	大井川浅し。六十六文渡し	百十一
		掛川宿	同 掛川市	本陣沢野弥惣左衛門	忠敬病氣	百十一
四	中食 (29)	見付宿	同 磐田市	脇本陣 大三河屋新左衛門	忠敬病氣	百十一
		浜松城下	同 浜松市中区	本陣杉浦惣兵衛	測量の諸器を仕立。恒星測定	百十一
五	同 (3, 1)	同	同	同		
六	(2)	上嶋村	同 浜松市中区	曹洞宗延命寺		百十一
七	(3)	気賀町	同 浜松市北区	中村与太夫	恒星測定	百十一



八	(4)	同	同	同	雨天逗留。地図を成	
九	(5)	同	同	同	氣賀町へ引佐峠、逗留測。忠敬病氣、秀藏は地図を成。	百十一
十	(6)	同	同	三河屋喜右衛門	忠敬病氣	百十一
十一	(7)	同	同	同	大風曇天逗留。恒星測定	
十二	(8)	愛知県豊橋市	夏目藤左衛門	庄屋平左衛門	忠敬病氣全快	百十六
十三	(9)	同	同	同	恒星測定	百十六
十四	(10)	同	同	同	豊川村に稲荷の社あり。国々より参拝群集のよし。立寄で一見しぬ。恒星測定	百十六
十五	(11)	同	同	同		百十五
十六	(12)	同	同	同	池鯉鮒鳴海の間にて、西本願寺門跡に行逢い。	百十五
十七	(13)	同	同	同	末永村、山中忠左衛門宅へ立寄。	百二十九
十八	(14)	同	同	同	恒星測定	百二十九
十九	(15)	滋賀県甲賀市	丸屋金右衛門	万屋伝兵衛	天奏明朝当宿小休に付、二軒宿に成。此夜、石部宿より天奏方明朝早立に付、我等出立を遅く致候様申来る。	百二十九
二十	(16)	同	同	同	此日天奏方院使に途中にて逢、道の側に避。院使は梅小路前大納言殿なり	百三十三
二十一	(17)	同	同	同	石山寺へ立寄	百三十三
二十二	(18)	同	同	同	柴山外5名等を京都一見に遣。	百三十三
二十三	(19)	同	同	同	御香宮参拝。大坂町奉行用人並、間清市郎へ書状を出す。	百三十三
二十四	(20)	同	同	同	雄山八幡宮へ不残参拝す。	百三十五







二	(16)	徳嶋城下新魚町 東新町	同	徳島市	荒井武兵衛 中島屋四郎兵衛	安宅天文台へ立寄。	百四十二
二十	中食 (15)	南斎田村	同	徳島市			百四十二
十九	(14)	宮嶋浦	同	徳島市	本陣鈴屋茂三郎 沢口助之丞	下川辺は地図、宮島浦へ先行。	百四十二
十八	(13)	同	同		同	同所逗留測。稲生は地図	百四十二
十七	(12)	同	同		同	大風雨逗留	
十六	(11)	岡崎村	徳島県鳴門市	真言宗蓮花寺 真言宗法宗寺			百四十二
	中食 (10)	淡路島福良浦島取	同	南あわじ市	真言宗蓮花寺 真言宗法宗寺	鳴門潮を一覧	百四十二
十五	中食 (9)	淡路島阿万東村	同	南あわじ市	本陣庄屋吉兵衛 百姓兵治郎		百四十二
十四	(8)	同	同		同	沼嶋一周測終る。	
十三	(7)	同	同		同	波浪高測量難相成逗留 八幡参拝。別当真言宗竜登山神宮寺へ立 寄	
十二	(6)	同	同		同	雨天逗留	
十一	(5)	沼嶋	同	南あわじ市	本陣庄屋 多田七郎右衛門 年寄八兵衛	同所逗留測。雨のため一周測残し。	
十	(4)	淡路島相川村	同	洲本市	立田在兵衛	土生村より一里沼嶋へ渡海す。	百四十二
九	(3)	淡路島由良浦	同	洲本市	本陣庄屋門右衛門 年寄太右衛門	稲生、佐助、相川村へ朝より越、地図、又 象限儀を磨	百三十八
八	中食 (2)	淡路島内田村	同	洲本市	五兵衛	恒星測定	百三十八
七	(1)	淡路島洲本	同	洲本市	本陣鍋屋保野弥 鍋屋茂一郎	恒星測定。阿州候より緋温餅一箱、五色 索麵一箱、寒製飴一桶御贈被下。即受 納。	百三十八
	中食 (4, 1)	淡路島志筑浜村	同	淡路市	真言宗東山寺 菅平兵衛		百三十八
六	中食	淡路島佐野村	同	淡路市	本陣恩頂寺仁三郎 和右衛門	下川辺病氣に付療治	百三十七



一	文化五年四月		(1808)	中食	橋浦	同	阿南市	本陣庄屋 東条政左衛門 真言宗光明寺	同所逗留測。	百四十七
	(4, 26)	榑地村								
三〇	(25)	橋浦	同	阿南市	本陣庄屋 東条政左衛門 真言宗光明寺	長嶋、螺貝岬、鵜渡嶋迄一周を測。小勝嶋、高嶋各一周を測。	百四十七			
	小休	答嶋村	同	阿南市	福田卯ノ助		百四十七			
	中食	答嶋村	同	阿南市	樋上定右衛門		百四十七			
二九	(24)	橋浦	同	阿南市	本陣庄屋 東条政左衛門 真言宗光明寺	坂部止宿へ先行。	百四十七			
	中食	答嶋村	同	阿南市	『久』新浜力太		百四十七			
二八	(23)	中林村	同	阿南市	真言宗天狗山新福寺 百姓助太夫		百四十七			
	(22)	今津村	同	阿南市	至心山信行寺 西本願寺派		百四十七			
二七	中食	和田嶋村	同	小松島市	庄屋森瀬左衛門		百四十七			
	(21)	同	同		雨天逗留		百四十七			
二五	(20)	小松嶋浦	同	小松島市	本陣寺沢慶太郎 森八左衛門		百四十七			
二四	(19)	同	同		同	恒星と午中太陽測定。 大滝山持明院の諸堂並に滝を一覧し、日蓮宗本行寺の自然庭園を見る。それより勢見山観音寺の金比羅大権現へ立寄帰宿。出立跡にて象限儀到れ、遊表、遠鏡留の角輪、大に損ず。金具を直し捻をしめて此夜測量南北の差を生ず。				
二三	(18)	同	同		同	雨天逗留。当国主より被下物数品、江戸迄相届を依頼する。				
二二	(17)	同	同		同	小雨逗留。国主より贈物。当所より江戸幸便に厩局へ書状を出す。				



十七		十六		十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二
(12)	中食	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	中食	(3)	(2)	(5, 1)	(30)	(29)	(28)	(27)
穴喰浦	穴喰浦那佐湊	鞆浦	同	同	同	同	牟岐浦(西牟岐浦)	同	日和佐浦奥河内村	木岐浦	東由岐浦	同	阿部浦	伊座利浦	同	同	椿泊浦
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
海陽町	海陽町	海陽町					牟岐町		美波町	美波町	美波町		美波町	美波町			阿南市
本陣 年寄田井久左衛門 大庄屋百々伊之丞		本陣 浄土宗東林山弘誓寺 三郎右衛門	同	同	同	同	本陣 浄土宗米忠山西念寺 与左衛門	同	本陣 真言宗松尾山観音寺 五郎四郎	真言宗神護山神福寺	本陣滝悦郎 白圭山長円寺	同	真言宗金竜山光明寺 喜多条嶋之助	真言宗海見山極楽寺 浜野堅左衛門	同	同	本陣 真言宗慶谷山福蔵寺 西本願寺派 寒江山等覚寺
恒星測定			出羽嶋一周測。津嶋半周測。沖小津嶋、 地小津嶋遠測。牟岐浦(乗船)大嶋一 周測。	雨天逗留	雨天逗留	雨天逗留		同所逗留測。忠敬丑子日記を写。稻生地 図。	此日雨度々降出し海荒船測成し難、山峯 を越て測、衣服濡て甚苦し。		恒星測定	同所逗留測。下河辺、稻生地図、青木病 氣。恒星測定	坂部、下河辺地図、青木病氣熱し胴着を 脱。恒星測定		伊嶋一周測。向嶋半測。恒星測定 同所逗留測。坂部、稻生残居て地図をな す。		野々嶋、舞子嶋を測。
百四十九	百四十九	百四十九	百四十九				百四十九	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七	百四十七



[illegible]







# 各地のニュース

佐原諏訪公園  
―子供達による

伊能忠敬銅像清掃―

大河ドラマ化推進協議会主催による「伊能忠敬銅像清掃」が去る平成二十六年一月十九日、佐原小学校の皆さん達により行われました。  
参加児童約四十名、父母二十名、宮崎市教育長、他関係者二十名で、高所作業車二台。子ども達は高所作業車に乗っていつも見上げている忠敬さんに触れて大満足でした。



高所作業車に乗り掃除をする佐原小学校児童

第十三回

忠敬江戸入りフォーデューウォーク

NPO 千葉県ウォーキング協会主催による忠敬江戸入りフォーデューウォークが去る平成二十六年一月二十三日(木)から二十六日(日)の四日間の日程で行われた。(総行程は百三十一km)

初日(二十三日) 九時に佐原中央公民館集合、出発式の後、その日のゴール成田山新勝寺に向け元気よく出発した。

二日目(二十四日) 栗山公園から

我孫子市手賀沼公園

三日目(二十五日) 手賀沼公園から

市川関所跡

四日目(二十六日)

市川関所跡からゴール富岡八幡宮。



三々五々河川敷に集まるウォーカー約300名

四日目にトライ

当日の集合場所は江戸川河川敷に変更になった。団体歩行18kmに挑戦。川風を受けて快調にスタート。

与農親水緑道・鹿骨親水緑道・小松川境川親水公園・大島小松川公園で昼食。東京は水の都と再確認。水辺の散策コースが整備されているのに驚く。午後は仙台堀川公園・木場公園を経てゴール富岡八幡宮に到着。久しぶりのウォーキングに足もパンパンだったが、ゴールでは大勢の出迎えを受けて大感激。疲れもすっかり忘れていました。(M)

第三回 伊能忠敬銅像清掃デー

寒空のなか小学生たち

一月二十六日(日)に東京・深川富岡八幡宮の伊能忠敬銅像の清掃が行われました。三回目の今年は、寒い午前を避けて快晴の午後から実施し、地元の江東区立数矢小学校の児童三十六名と、校長以下教員全員十九名が参加し、前週の十九日(日)に香取市諏訪公園で百年ぶりに伊能忠敬銅像の清掃を行った香取市立佐原小の児童十八名、父母六名が、大河ドラマ推進協議会の山村増代さん、木内信次さん、伊能敏雄さんらとともに佐原からバスで初参加しました。十二時半より富岡八幡宮結婚式場にて大河推進のPR用に誕生したキャ



銅像清掃をする、数矢小・佐原小の皆さん





富岡八幡宮で宮司さんのお話を聞く皆さん



歩測に挑戦  
(数矢小・佐原小の子供達)

ラ「ちゅうけいSUN」が見守る中で関係者の挨拶、記念講話（伊能忠敬・佐原から深川へ）を行いました。つづいて、近くの深川公園で今回より参加の日本数学検定協会による個人・代表選抜方式で両校児童の歩測大会を行い、多数の表彰者が出ました。

伊能忠敬銅像の清掃は人数が多いので、学年別に四、五人のグループに分けて、水洗い、ワックス掛けを行い一年間の汚れを落としました。銅像前で参加感謝状・記念品贈呈、歩測成績発表・表彰式を行いました。二十三日（木）佐原を出発し、四日間を歩いて江戸入りした「第十三回忠敬江戸入りフオーデーウオーク」（千葉県ウオーキング協会、一三・一キロ）に参加し、ゴールしたウオーカー約三〇〇人と一緒に、八幡宮本殿前で玉串奉奠を行い、十五時に終了しました。ご後援、ご協力を頂いた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

（伊藤 浩史）

#### 香取支部長からの報告

「伊能忠敬清掃デー」

佐原小児童も参加して楽しく交流

伊能忠敬研究会及び大河ドラマ化推進協議による「伊能忠敬清掃デー」が地元数矢小学校児童・父母・校長先生他に加えて、今年は佐原小学校から児童十八名、PTA会長、香取市教育長、大河推進協の皆さんら、四十名が参加しました。

佐原からバスで上野源空寺へ。忠敬先生、高橋先生の墓にお参り。富岡八幡宮へ移動。ここで持参のお弁当で昼食。午後、富岡八幡宮での開

会式に臨みました。鈴木純子研究会代表の挨拶。宮司さんのお話「境内を流れる水は佐原に通じている」と。記念講話。歩測大会。伊能忠敬銅像清掃。記念撮影。歩測大会の表彰式。忠敬江戸入りウオーカーの出迎え。と盛り沢山でした。

関係者から佐原小学校の皆さんは内容ある交流会ができた。今度は数矢小の皆さんを佐原へご招待したいとの話ができました。（木内信次氏）

#### 小説家 童門冬二さん

伊能忠敬を例に語る

去る二〇一四年二月一二日付け

朝日新聞「異才面談」紙上で歴史上の人物（武田信玄、黒田官兵衛、上杉鷹山）を挙げたうえで第二の人生を上手く生きた人として「伊能忠敬」を例にあげている。

忠敬は名家を再興し、隠居後の自由を確保した上で、第二の人生で、やりたかった天文学をやり、社会に役立たせようとした。

五十才は分岐点「会社が悪い、社会が悪い」と愚痴を言うのもよいが「公」を考えよ！と。「ふてくされるな五十代」、「五十歳代は人生の棚卸。自分を見つめる時機にすべき」と語る。（時機を大きく逸したM）  
新聞提供：菅原満氏（大河推進協会員）

読売新聞文化欄（二月一二日付）  
「直轄・伊能測量 各藩腐心」

伊能測量を受け入れた各藩の対応を生々しく紹介。渡辺名誉代表のコメントも。関連記事が本号「出雲市手銭家文書の紹介」にあります。

島田泰江さん読売新聞で紹介  
―会員で外川ミニ郷土資料館―

二〇一四年二月一五日付読売新聞地域版「ちば レジャー」の「駅前さんぽ」で紹介されました。

ミニ資料館は存続危ぶまれる銚子電鉄終点の「外川」にあります。

島田さんは銚子の存続と地元外川の発展を願って日々外川を熱く語っています。「外川は坂道と夕日よ」という島田さんを訪ねてみては如何でしょうか。富士山の方位測量の地「犬若岬」は徒歩圏です。足を延ばせば景勝地屏風ヶ浦を臨むマリナ海岸で、ここには昨年建立した伊能忠敬銚子測量の碑があります（M）







## 会員便り

(長野県須坂市北国街道  
福島宿在住 市川美津夫)

「伊能研究」七十一号の金沢支部の河崎さんの記事「伊能探訪のすずめ」を読み、河崎さんのような立派な記事ではありませんが私も旅行記を投稿させていただきます。

私は現在果樹栽培をしている関係で、畑で信越放送のラジオを聞きます。そこでよく登場されるのが能登半島の石川県志賀町(旧富来町)酒見の「海の丘倶楽部」のおかみさんです。

その宿は漁師もしていて、来てくれるお客さんに新鮮な海の幸をふるまうということと、心のこもった語り口が忘れられず、ぜひ会ってみたいというわけで旅行を計画してみました。

そこに「伊能研究」七十一号が届き、私も早速、三種の神器(地図・宿泊地・測量日記)を用意して平成二六年一月三十日に妻と旅立ちました。まず金沢駅で河崎さんと今度入会された室山さんと会い、初対面とは思えない打ち解けた雰囲気でお交流でき、どこへ行ったら良いか等色々教えていただきました。

大変ありがたかったです。同好の

士とは良いものですね。

その後バスで富来町に行き、降りたバス停の近くが測量隊の泊まった地頭町でした。その後約三キロ先の宿を目指して、平山群蔵の伊能測量隊支隊が測量したであろう海岸を歩きました。

第四次測量日記の享和三年七月八日にある「富来川を渡れば砂浜になる」そんな光景でした。

夜は信州の山国では食べたことのない新鮮な海の幸とおかみさんとの会話が弾みました。

写真は翌日の朝、おかみさんと私で撮ったものです。

翌日は金沢に戻り、昨日河崎さんより教えていただいた、伊能公が享和



三年七月二日に宿泊した尾張町の住吉屋さんの場所に行きました。

現在は森忠商店になっており、揭示してある伊能関連資料を見ながらおかみさんと話が弾みました。その写真です。その後主計町・ひがし茶屋街・金沢城を見て帰途につきました。

今回の旅行は色々な出会いがあった充実したものになりました。

伊能研究会会員の皆様も気軽な投稿いかがでしょうか。

会員の皆様、また信州にお寄りの節は市川の手帳(090・9354・1419)までお気軽にご連絡ください。伊能交流を致しましょう。

また一昨年から二十名の仲間と街

道を歩いています。昨年までで北国街道を歩き終え、今年は松本の南の塩尻市の洗馬宿より善光寺宿までの通称善光寺街道を歩く予定です。

皆さまのご参加お待ちしております。

### 訃報

本会会員で鳥取大学名誉教授の赤木三郎氏が本年二月五日にご逝去されました。享年八三歳でした。

伊能測量隊が町を通過したときのエピソードなどを最近まで丹念に調査されており、本誌への投稿原稿も準備中だったと伺っております。

ご冥福をお祈りいたします。(高安記)

## 平成 26 年度総会の予告

6月21日(土)、富岡八幡宮を予定しています。  
議題等の詳細は追ってご連絡します。  
多くの会員の参加をお願いします。

## 会費納入のお願い

(株)ゆうちょ銀行の払込取扱票を同封します。

口座番号 00150-6-0728610 と

加入者名(伊能忠敬研究会)は印字済みです。

平成 26(2014)年度から年会費は 5000 円です。

平成 25 年度までの未納がある方には、金額のお知らせを同封しますので、よろしく願います。

なお、通信欄に近況などお書きください。



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約 2000 字（704 字×3 段または 480 字×4 段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的な JPEG 形式または TIFF またはフォトショップの PSD 形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで 350ppi 程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが 100mm×75mm で 350ppi のカラー写真の場合、1MB 前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって 5M モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合は L 判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG フォーマット）にしてください。カラー数の少ない図は GIF 形式のフォーマットでもかまいません。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CD などのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 inohken\_kaishi@koalane.jp

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4-6-9 日本地図センター 2 階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。（二〇一四年度より入会金廃止、年会費五千元に変更）  
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台 4-9-6

日本地図センター 2 F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3469-6752

事務局メール inohken@ae.aunet.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六 〇〇

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.tl.rim.or.jp/~koko>

### 編集後記

◇今回の編集作業は M さんが全面的に担当しました。MS ワードでの編集は意外と面倒で、慣れるまでは大変です。ご苦勞様でした。◇次年度からは年三回の発行となります。その分内容を充実させていきたい、と考えています。会員のみなさまの一層のご協力をお願いします。◇ところでこのところ関東は記録的な大雪が続く、山沿いでは孤立集落も出てしまう状況でした。地球温暖化はどうなったのか？ともかく気候がとて不安定になっていることは確かでしょう。◇忠敬さんが日本中を測量して巡っていた頃はダルトン極小期といって太陽活動が不活発で、現在よりも一般に寒冷だったと言われています。実際はどうだったのか？今一度その眼で『測量日記』などを見直してみると面白いかも知れませんね。（K・T）